

都市型親族集住 2.5世帯同居の実態

調査報告書

旭化成ホームズ株式会社

くらしノベーション研究所

はじめに

二世帯住宅という住まいを1975年に当社が初めて発表して以来37年が経過しました。当初はこのような住まいにはまだ抵抗感もあり、受け入れてもらうのに苦労した時期もありましたが、親子同居に関する様々な視点からの調査・研究の報告や住まい方の提案などにより、親子同居のひとつの形として定着するにいたりしました。

一方、この37年間の変化を見ますと、当初は同居といえば息子夫婦との同居が中心でしたが、いまでは娘夫婦との同居も当たり前になり、また、同居の理由も、子世帯の住宅取得が容易になるという経済的な理由が上位だったものが、家事・育児の協力など、両世帯にとって日常的な暮らしの中でのメリットを考えた積極的な同居のかたちが目につくようになってきています。

これらの変化には、高齢社会の進展により親の世代にとっては長い高齢期を安心して豊かに暮らせる住まいが、また子供の世代にとっては共働き世帯増加の中で安心して働きながら子育てできる居住環境が求められるという社会的な背景があると考えられます。二世帯住宅はこのように社会の状況の変化をある意味で素直に反映しながら変化してきたのでないかと考えております。

今回は、現在急速に進んでいる晩婚化、非婚化、離婚率の上昇などにより30代40代の単身者が急増しているという状況の中で、二世帯住宅に単身の子供（つまり子世帯にとっての兄弟姉妹）も同居している場合に着目し、まず、その兄弟姉妹を軸として同居の実態や意識を調査し、通常の2世帯同居とどの様な違いがあるかを探ることとしました。その結果、これまでの2世帯同居とは異なる「2.5世帯同居」とも言うべき新しいタイプの同居のあり方が見えてまいりましたので、ここにその内容を報告させていただきます。

また、今回は調査結果の報告と併せて、それに基づく商品「2.5世帯住宅」を提案させていただきました。この「2.5世帯住宅」の特徴は、同居している兄弟姉妹を独立性を持った一つの世帯（一人なので0.5世帯と表現）としてとらえ、より豊かな世帯間の交流や将来対応力の強化を図ったことにあります。今後二世帯住宅の発展型の一つとして増加する可能性があり、また住宅のストックとしての社会的な意味も大きいと考えます。この「2.5世帯住宅」が二世帯住宅と同じように住まいの選択肢の一つとして広く認知されればと考えております。

最後になりますが、今回の調査にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げますとともに、今回の調査報告及び商品提案が今後の同居を考える上でのご参考になれば幸いです。

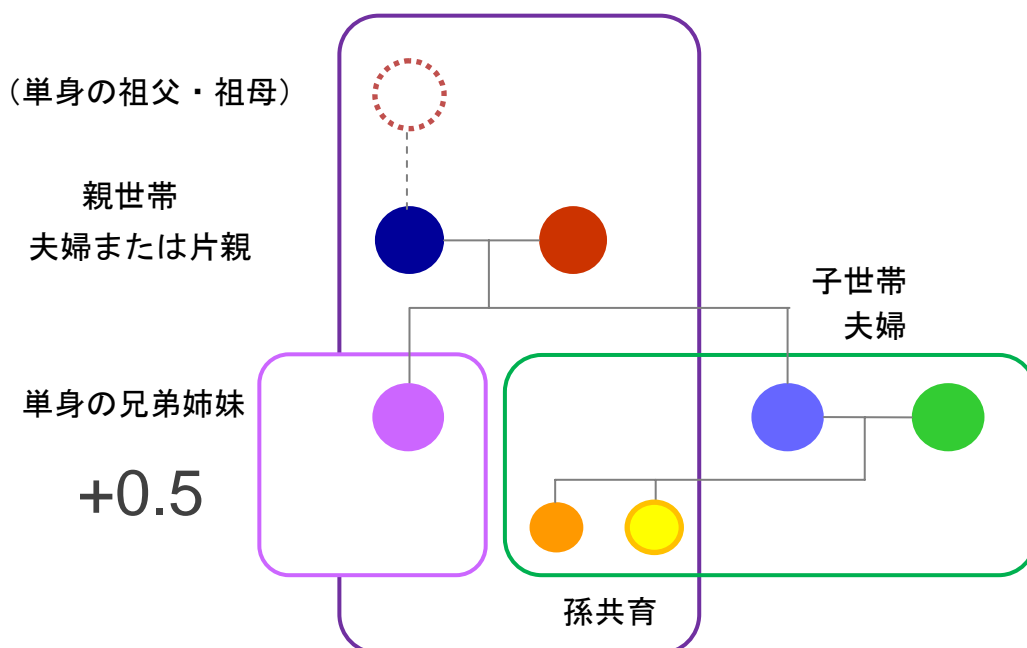
平成24年8月
旭化成ホームズ株式会社
暮らしノベーション研究所

2.5世帯同居とは

2.5世帯同居とは、主に親世帯・子世帯に加え、子世帯の兄弟姉妹に当たる単身者が同居する親子同居スタイルを指します。単身者は一人だけとは限らず、祖母と妹、姉と弟のように2人以上居るケースもあります。これらの単身者は親世帯と生活を重ねつつも自立できる収入を持つ場合が多く、従来の2世帯同居+0.5世帯の同居形態と考えられます。

従来の2世帯同居では親世帯が両親、または片親のみ、すなわち2人または1人の場合を主に想定して来ました。しかし晩婚化、長寿化の流れの中で、このような複合的な形の3人以上の親世帯の増加が見込まれます。

2.5世帯同居の家族構成は、2010年に報告した「孫共育」（親世帯子世帯共同で孫を育てる）の考え方を含めて、下図のように表現できます。



本報告書では「2.5世帯同居」という場合は親世帯+単身の子+子世帯が同居する家族の形態を指し、「2世帯同居」は単身の子が居ない親世帯+子世帯の家族形態を指します。これに対し「二世帯住宅」と呼ぶ場合は従来通り「キッチンが世帯別に2つある住宅」を表すものとします。その上で今回提案する住宅(後述)の商品名を「2.5世帯住宅」と命名しています。

都市型親族集住——2.5世帯同居の実態

第一章：親子同居のトレンド・40年の変化

1-1. 女性の長寿化で片親世帯が増えた	8
1-2. 女性の社会進出で専業主婦が減った	10
1-3. 晩婚化・離婚増で実家に住む単身女性が増えた	12
1-4. 親世帯の多様化	14
コラム：ヘーベルハウス居住者の声 1	16

第二章：2.5世帯同居の実態調査

2-1. 調査1：ヘーベルハウスの居住者調査	18
2-2. 調査1：家族の状況	20
2-3. 調査1：以前の居住状況	24
2-4. 調査1：現在の居住状況	26
2-5. 調査1：プラン分析で見る同居シングル個室の位置	28
2-6. 調査2：居住形態別の意識調査の概要	30
2-7. 調査3：ワーキングシングル女性調査の概要	34

第三章：2.5世帯同居の特徴——2世帯同居との違い

3-1. 2.5世帯同居のストレスとメリット	38
3-2. 集居をより楽しむ仲の良い家族	42
3-3. 就業状態：女性の社会進出が進む	44
3-4. 資金結集：家族の資金を集めた家づくり	46

第四章：2.5世帯住宅モデルの提案

4-1. 自分空間の充実	50
4-2. 分離した生活空間の中に交流空間を	52
4-3. 家族増減への対応力を増す「どっちも」マジック	54
4-4. プランニング例	56
コラム：ヘーベルハウス居住者の声 2	58

■有識者コメント:2.5世帯住宅の社会的意義

——東京大学大学院准教授 大月敏雄	59
-------------------	----

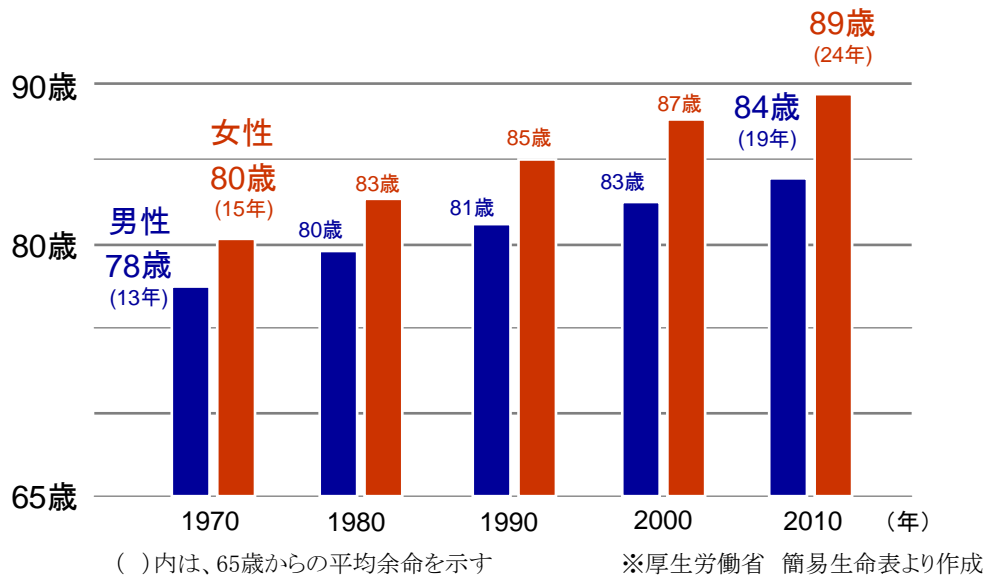
第1章 親子同居のトレンド・40年の変化

1-1. 女性の長寿化で片親世帯が増えた

■65歳の平均余命と寿命

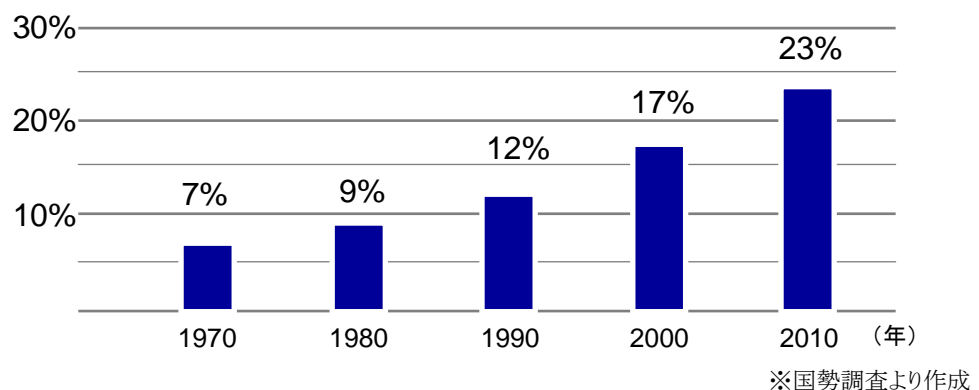
この40年間で、長寿化が進んでいます。65歳の平均余命（現在65歳の人があと何年生きるか）を1970年と2010年を比較すると、女性で約9歳、男性で約6歳、伸びています。2世帯の親世帯がより長生きし、2世帯で暮らす期間が伸びていると言えます。

また、女性の余命の伸びが、男性に比べて大きいため、男女の余命の差が開いています（1970年＝2.8年→2010年＝5年）。つまり、親世帯の母が片親となって生きる期間が長くなっていることが示唆されます。



■高齢化率

長寿化に伴い、高齢者が顕著に増加しています。高齢化率（全人口に65歳以上の人口が占める割合）は、1970年では7%だったものが、2010年では23%と、ほぼ4人に1人が高齢者というレベルにまで達しています。



■65歳の平均余命と寿命表

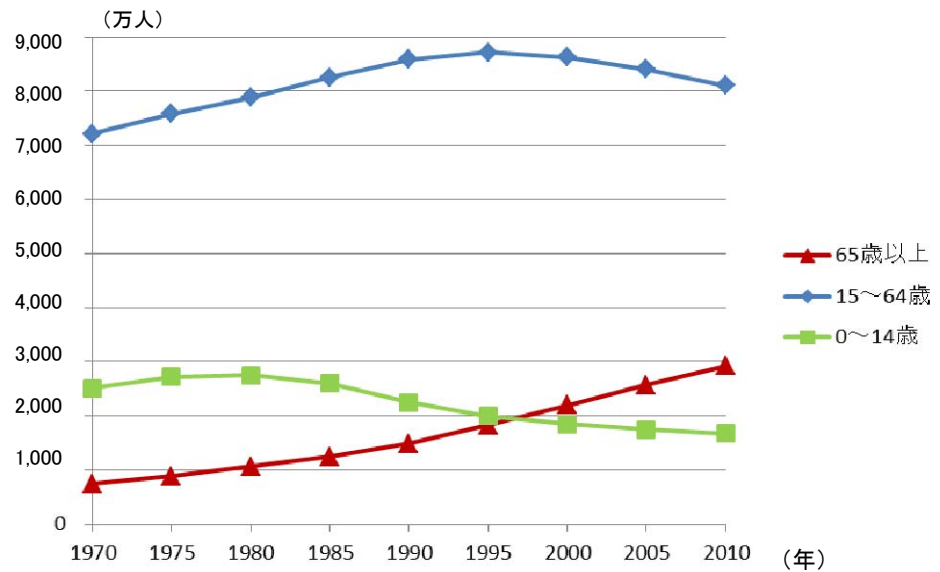
現在65歳の人の平均余命（あと何年生きるか）と、平均寿命（何歳まで生きるか）を示したものです。

平均余命	男	女	平均寿命	男	女
1970	12.5	15.3	1970	77.5	80.3
1980	14.6	17.7	1980	79.6	82.7
1990	16.2	20.0	1990	81.2	85.0
2000	17.5	22.4	2000	82.5	87.4
2010	18.9	23.9	2010	83.9	88.9

※厚生労働省 簡易生命表より作成

■年代別人口

左頁のグラフに、0-14歳人口、15-64歳人口を加え、5年毎の推移としたものです。



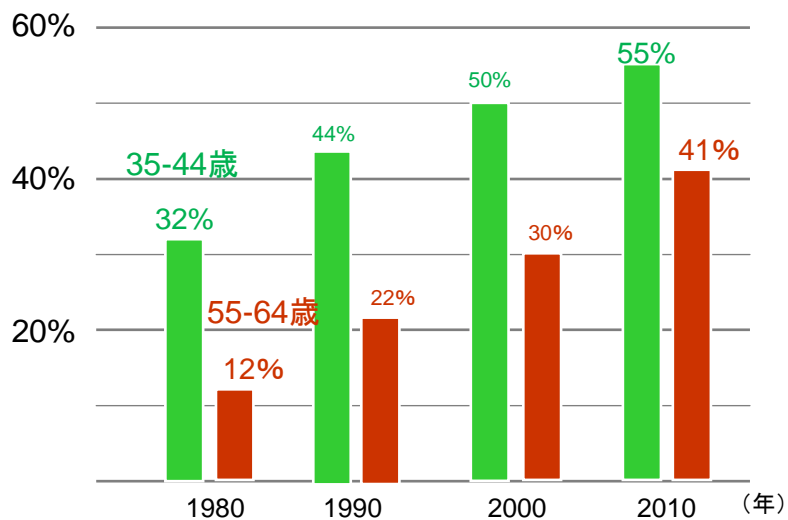
※国勢調査より作成

1-2. 女性の社会進出で専業主婦が減った

■雇用者妻の就業率

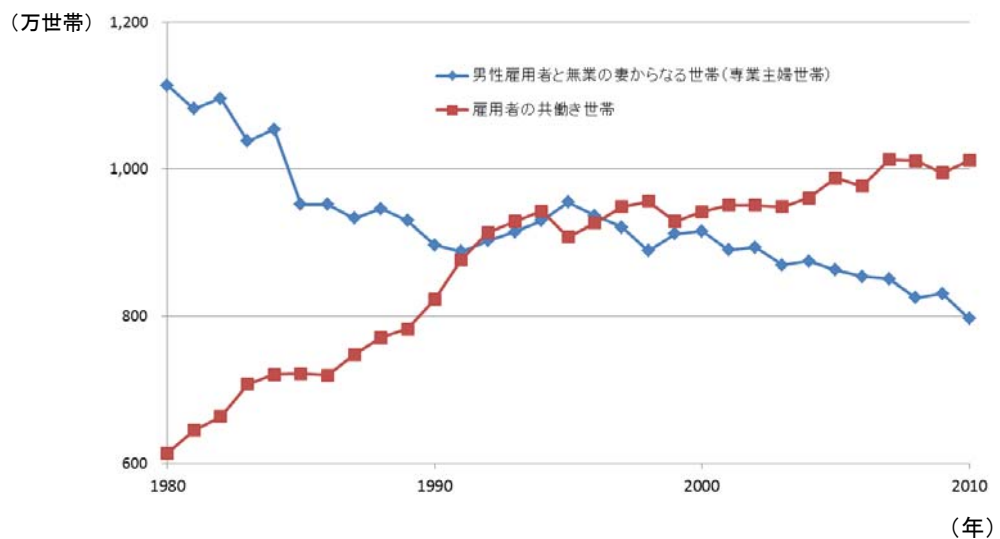
女性が働きに出る（雇用者として働く）割合が年々高くなっています。2000年以降、共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回るようになり、その後も年々差が開いています。2世帯同居においても、子世帯の共働きは当たり前化しつつあります。

また、50代以降の女性の就業率の伸びは特筆すべきものがあり、1980年には12%だったものが、2010年には41%と、3倍以上になっています。2世帯同居における母親の役割が、「家事に専念」から「外に出て働く」と、変化してきていると言えます。



※総務省 労働力調査より作成

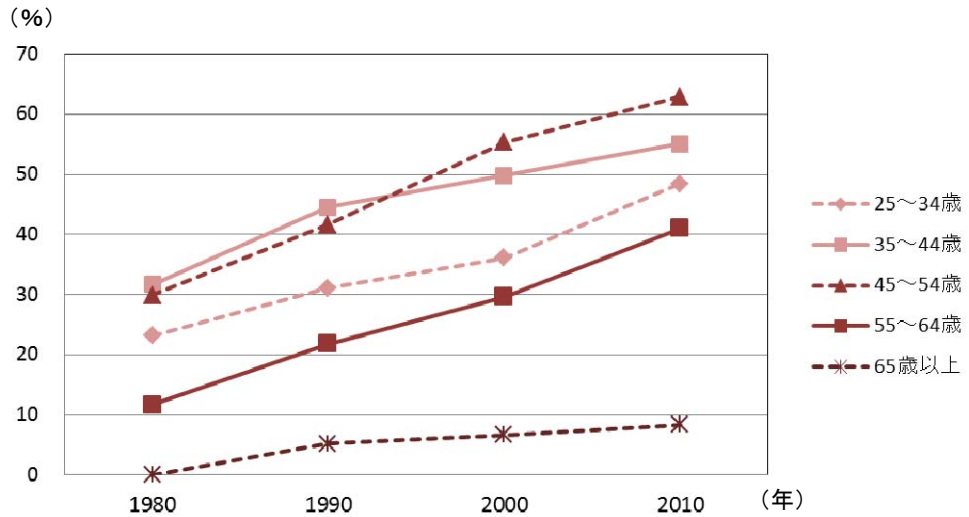
■共働き世帯と専業主婦世帯



※厚生労働白書 および 総務省 労働力調査より作成

■女性の年代別雇用者率

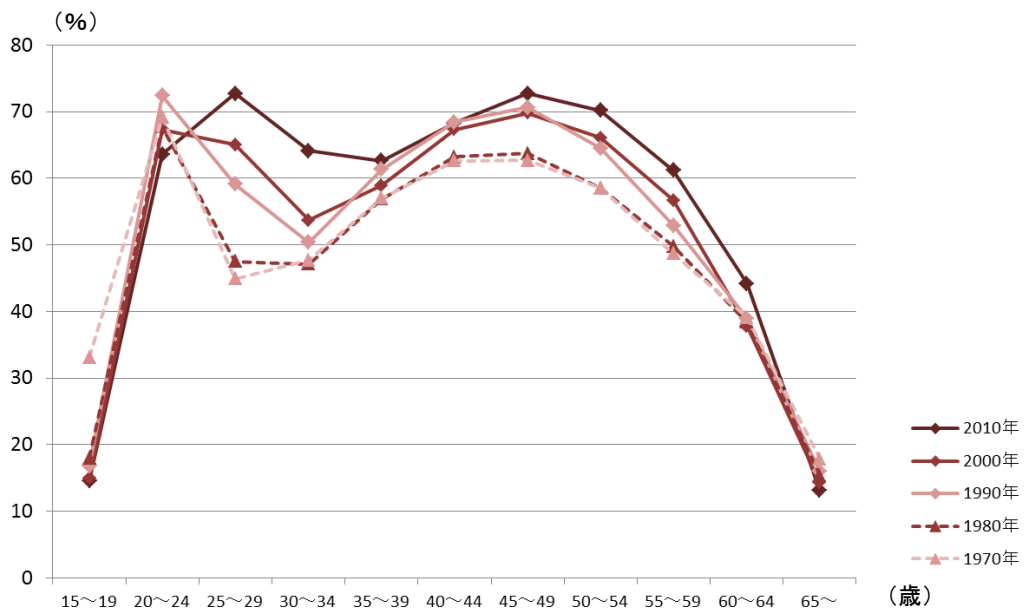
妻が雇用者として就業している割合を年代別に示したものです。



※総務省 労働力調査より作成

■女性の年代別就業率

女性（既婚者、未婚者を含む）が就業している割合（雇用者、自営業、農林業を含む）を、年代別に示したものです。20代後半から40代前半にかけて就業率が落ち込む現象（いわゆるM字カーブ）が見られますが、その落ち込みは年々浅くなっています。

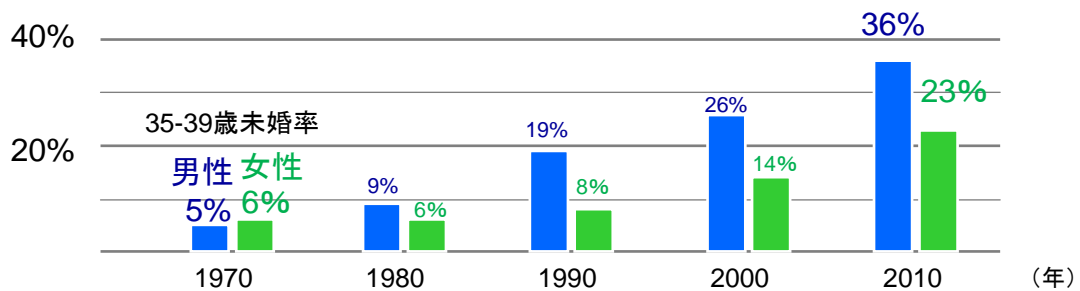


※総務省 労働力調査より作成

1-3. 晩婚化・離婚増で実家に住む単身女性が増えた

■35-39歳未婚率

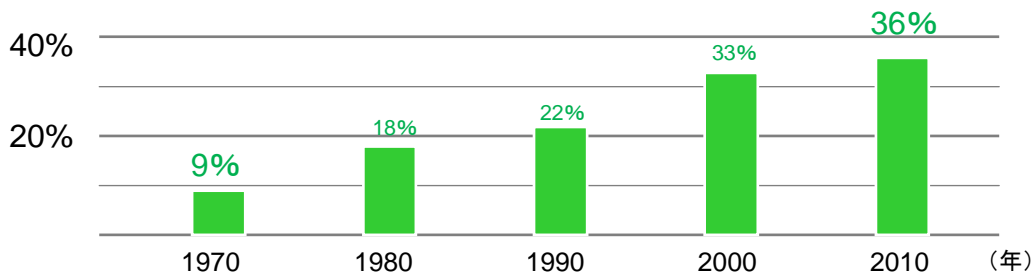
男女とも未婚率が上昇しています。35～39歳の未婚率に着目すると、2010年では、男性では約3人に1人（36%）、女性では4人に1人（23%）が未婚となっています。特に、女性の未婚単身者については、実家に同居し続けているケースが多いと想定されるため、後述する家族類型にも影響を与えています。



※国勢調査より作成

■離婚件数/婚姻件数

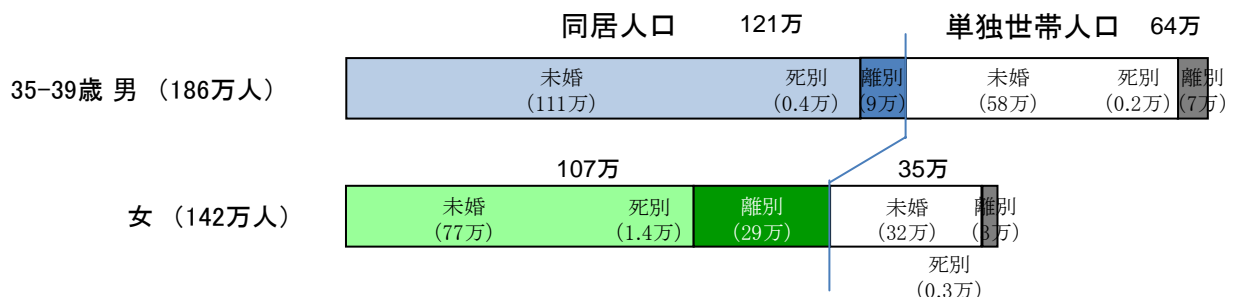
婚姻率が減少傾向にある一方で、離婚率は増加傾向にあり、婚姻件数に対する離婚件数の割合は年々、上昇しています。2010年では36%と、婚姻したおよそ3組に1組が離婚しているというレベルにまで達しています。離婚して「実家に出戻る」ことも珍しくなくなっていると言えます。



※厚生労働省 人口動態調査より作成

■35-39歳単身者の男女別同居比率

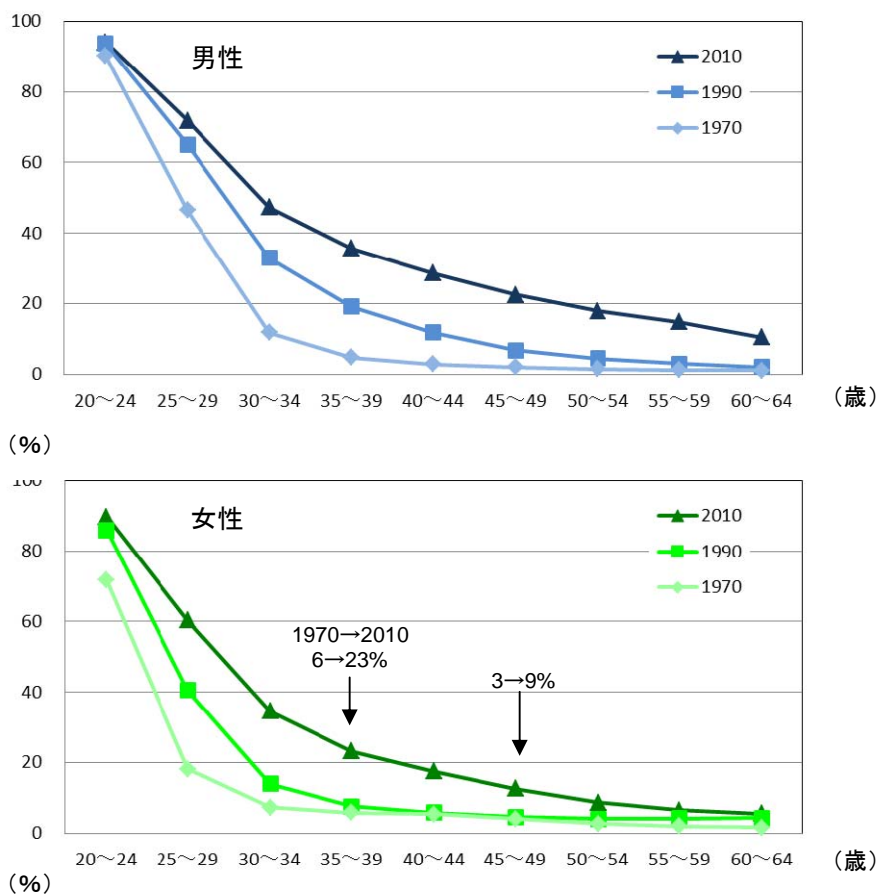
30代後半の単身者は男性の方が多いのですが、女性は単身で住まないことが多く同居者人口で見ると差は少なくなります。特に離別者では女性がより実家に戻っている傾向が見られます。



※国勢調査より作成

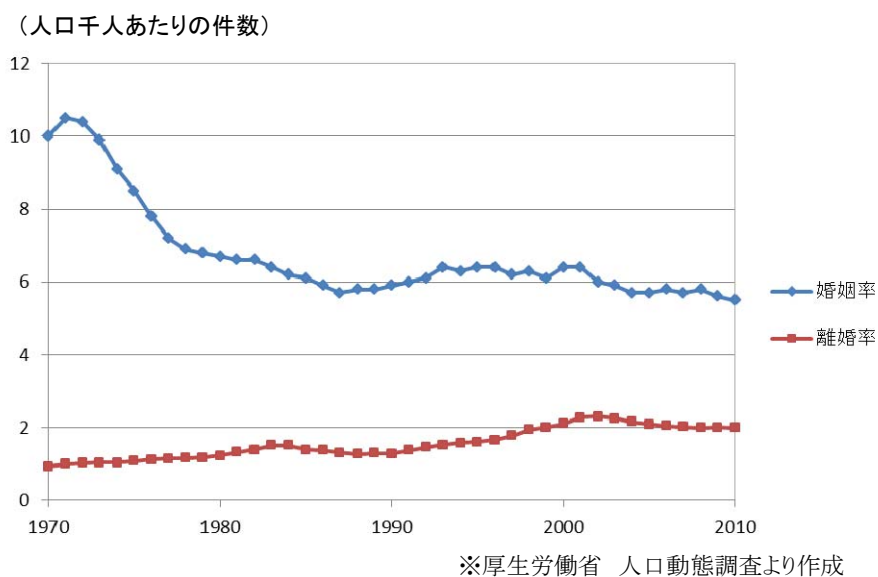
■年齢別未婚率

男女の年代別未婚率を20年間隔で示したものです。



■婚姻率・離婚率

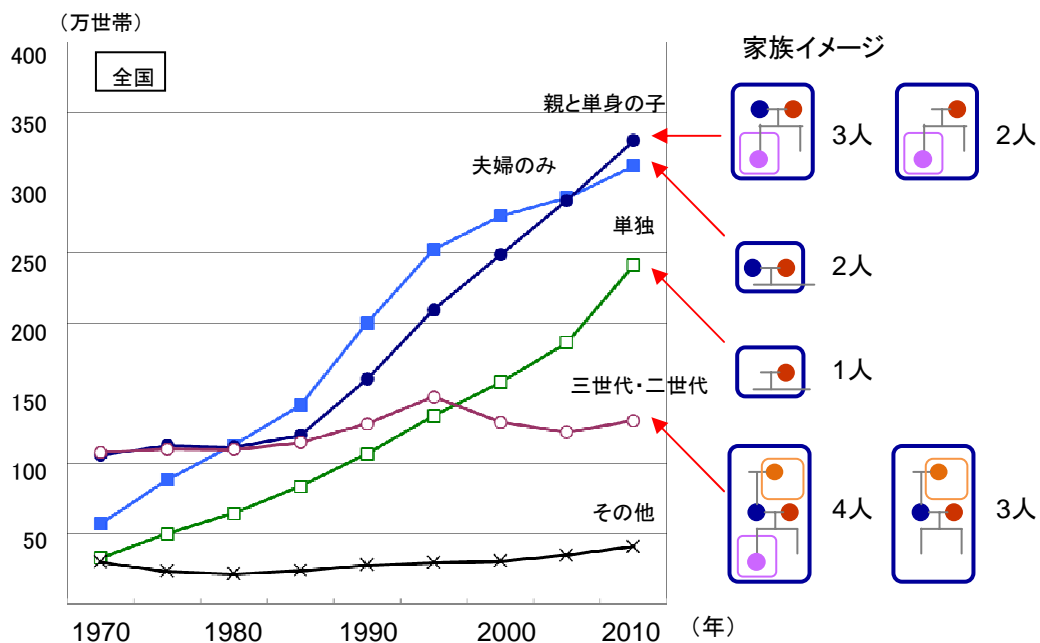
婚姻率・離婚率は各年の人口千人当たりの婚姻件数・離婚件数です。この離婚率を婚姻率で割ったものが左ページに示した割合です。



1-4. 親世帯の多様化

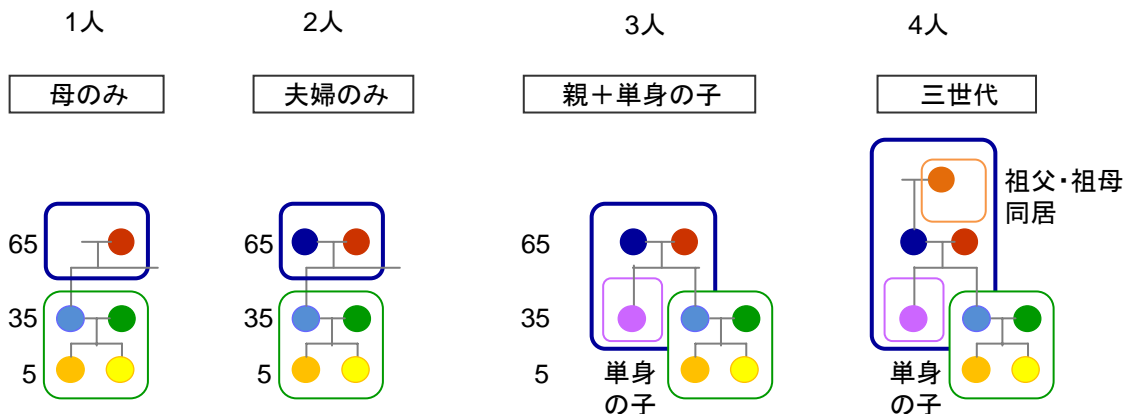
■60代の世帯主の世帯類型

国勢調査で世帯主が60代の世帯について、家族類型毎の数をみると、1970年代には「三世代・二世代」のべったり同居が多かったのですが、1980年代以降は「夫婦のみ」が最多となります。2010年の調査では「夫婦のみ」の世帯に代わり、「親と単身の子」の世帯が最も多くなりました。先に示した未婚者・離婚者の増加がこの傾向の背景にあると思われます。



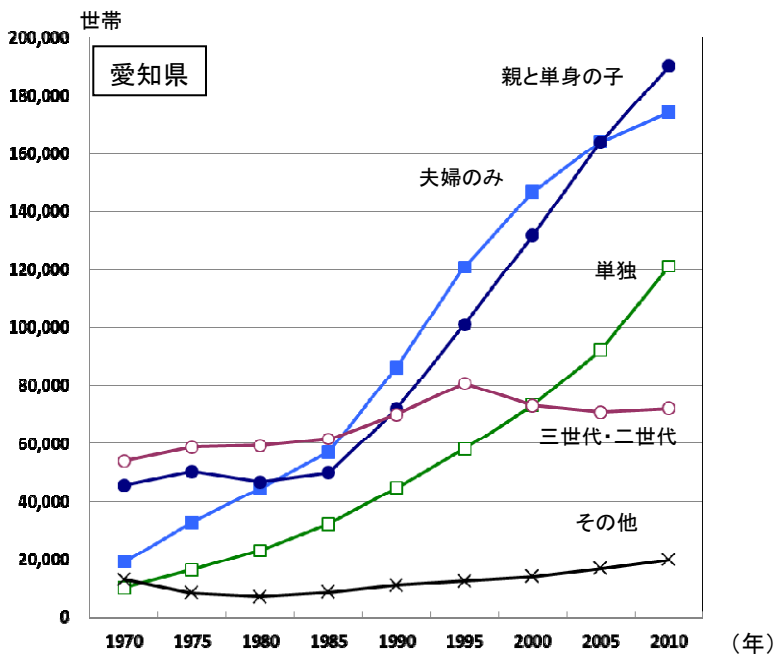
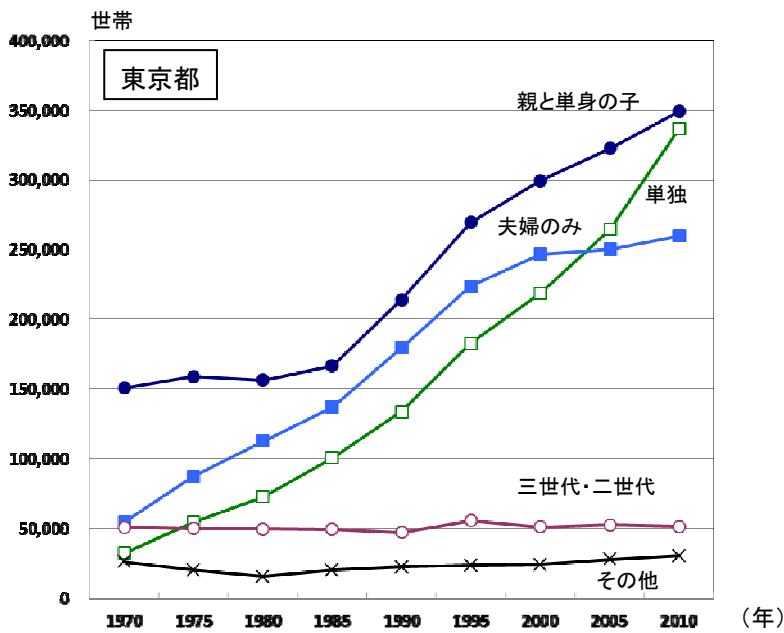
※国勢調査より作成

■多様化した親世帯の形態+子世帯



「親と単身の子」は親世帯世代の多様な都市に多い現象であり、東京都では常に最も多い世帯類型でした。東京都では全国平均に比べ、「単独」が多く、「三世代・二世代」が少ないといった特徴があります。

また、「三世代・二世代」が多いといわれた愛知県においても、2010年には「親と単身の子」の世帯が最も多くなっています。



■コラム：ヘーベルハウス居住者の声 1

2.5世帯同居家族内での孫（子世帯の子供）との関わりについて、アンケート調査からヘーベルハウス居住者の声をご紹介します。

■孫の知識・成長に役立っていること（調査1-追加調査より）

子世帯が共働きの為、子供が学校から帰宅して来た時に母が毎日居てくれ、妻が帰宅するまで見てもらっているので助かっています。子供を叱った時などは親世帯に行ったりして自分(子供自身の部屋)の部屋に閉じこもらず母親や妹の居場所に行き慰めたりしてもらっているのは良いことかなと…。妹と子供(女の子15歳)が、いろいろ妹の部屋で話しをしたり一緒に出掛けたりと仲良くしてもらっており、DVD、CDの貸し借りやPCを使わせてもらったりしています。(父母+妹/息子夫婦+孫2人)

母が読んだ本を、私の子供に貸したり、妹が、子供の誕生日に本をプレゼントしたことがあります。親世帯は、子供の為に“子供新聞”をとってくれています。(父母+妹/息子夫婦+孫2人)

子供は小学校6年の男の子です。親世帯母には編み物を教わったことがあり、先日はチラシで作るごみ入れの新しいバージョンを教わってきました。妹からはサブカルチャーの知識を与えられているようで、ゲームソフトの貸し借りをしています。子供が一人で親世帯に遊びに行き、色々な話をすることで知識や成長に役立っているのでしょうか。食事のマナーも母世帯の2人に言われると素直に聞いています。親世帯へ行く前には必ずインターホンで確認を取ってから、世帯間の「どこでもドア」を通して遊びに行く気遣いも、親世帯がこちらに来る際必ず同じようにしているからでしょう。(母+妹/息子夫婦+孫1人)

特に長男は同居前は人見知りが激しかったですが、二世帯同居するようになり改善しました。長女ははじめから親世帯父母と二世帯同居しているため、人見知りはほとんどありません。長男は学校の勉強よりも(!?)色々な物を工夫して作るのが好きで、最初は親世帯のリビングで色んなものを作っていたようですが、弟も「手先が器用」で色々手伝ってくれたのをきっかけに、弟の部屋に出入りし始めたようです。また部屋も子世帯に上がる階段のすぐそばにあるため、親世帯へ行く時、帰って来る時に、気軽に寄って来るようです。(父母+弟/息子夫婦+孫2人)

第2章 2.5世帯同居の実態調査

調査1:ヘーベルハウスの居住者調査

調査2:居住形態別の意識調査

調査3:ワーキングシングル女性の意識調査

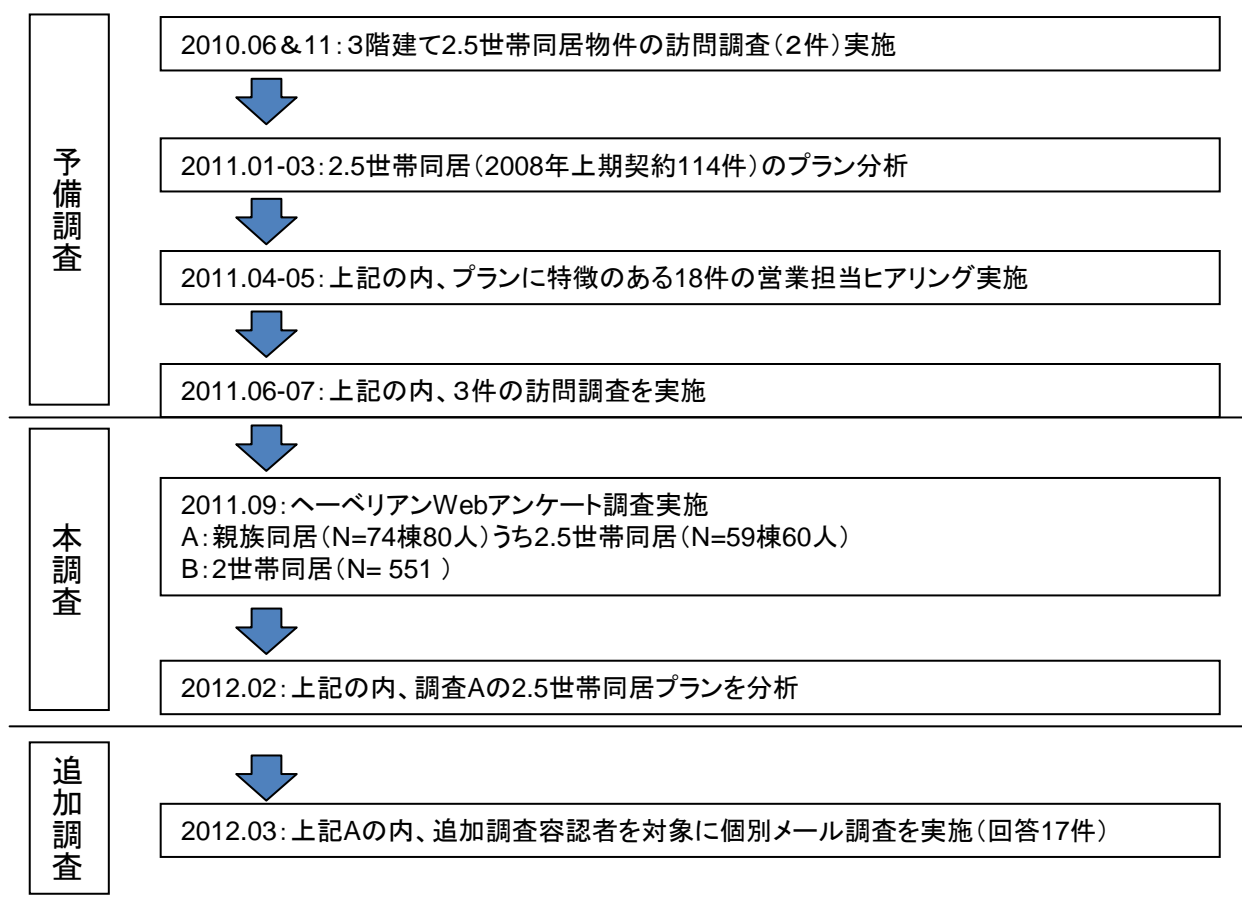
2-1. 調査 1 : ヘーベルハウスの居住者調査

■調査の目的

ヘーベルハウスにおける2.5世帯同居と2世帯同居を比較し、2.5世帯同居の特徴を反映した2.5世帯住宅の提案を行うこと。

■調査1:ヘーベルハウス居住者への調査

予備調査を経て、2011年9月にヘーベルハウス居住者へのWebアンケート調査を実施し、その後回答者居住プランの分析、並びに個別メールによる追加調査を行った。



■調査1:ヘーベルハウス居住者調査

<本調査>

■調査時期：2011年9月

■調査対象：自社建築注文住宅の居住者のうちヘーベリアンネット登録者中、

- 1)二世帯住宅である(全年代) または、
- 2)親子同居である(2000年以降の契約時アンケート回答者のみ) 方

■調査方法：Webアンケート

調査A：親子同居に加え、単身の兄弟姉妹・祖父母等が同居

調査B：親子同居のみ(調査A以外)

■調査エリア：自社建築エリア全体

関東～東海～関西～山陽～北九州の各都府県

<追加調査>

■調査時期：2012年3月

■調査対象：調査Aの回答者

■回答依頼送付：本調査の回答者の内、追加調査に同意いただいた方

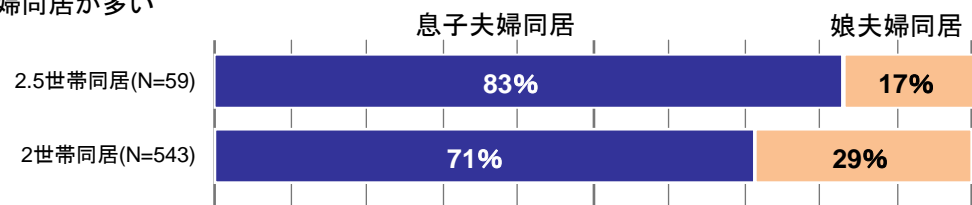
■調査方法：eメールにて調査票を送付、回収

2-2. 調査1：家族の状況

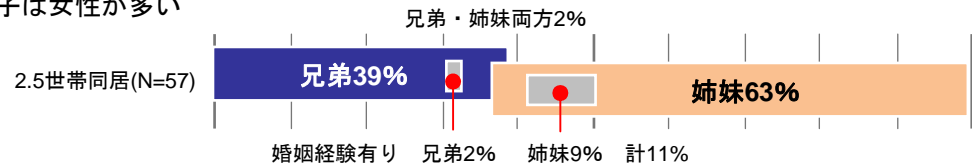
2.5世帯同居の子世帯は息子夫婦同居が83%を占め、2世帯同居の71%と比べ10ポイント以上多いのが特徴です。また、同居シングルは女性が63%と多く、単身姉+弟夫婦、単身妹+兄夫婦のような組合せが多くなります。女性の単身者が2世帯同居に加わって2.5世帯同居になっているのが典型です。なお、同居シングルの中には婚姻経験のある方(別居離別死別のいずれか)が計11%含まれています。

また、祖父祖母の世代でも単身の祖母が88%とほとんどを占め、男性より女性が長寿化したこの40年の傾向を反映した分布となっています。

■ 子世帯は息子夫婦同居が多い



■ 同居する単身の子は女性が多い



■ 祖父・祖母が同居する場合は祖母が多い



■ 平均年齢

	親世帯平均年齢 父 (いない場合は母)	子世帯平均年齢 夫 (いない場合は妻)
2.5世帯同居 (N=59)	72.0 歳	43.7 歳
親世帯 両親 (N=39)	71.1 歳	41.5 歳
親世帯 片親 (N=20)	73.6 歳	48.1 歳
2世帯同居 (N=551)	75.6 歳	47.4 歳
親世帯 両親 (N=300)	72.8 歳	43.5 歳
親世帯 片親 (N=251)	79.1 歳	52.1 歳

A

「親族同居」

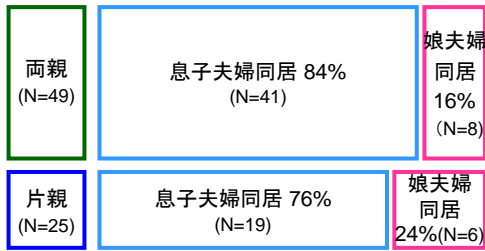
対象：親世帯と兄弟姉妹、祖父・祖母などの単身者、子世帯と同居している世帯

B

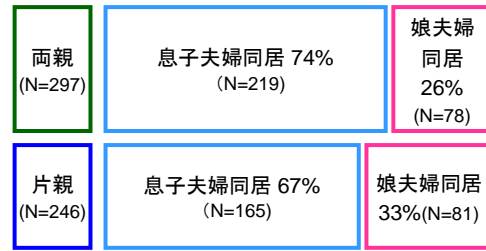
「親子同居」

対象：親世帯が両親または片親のみで、子世帯と同居している世帯

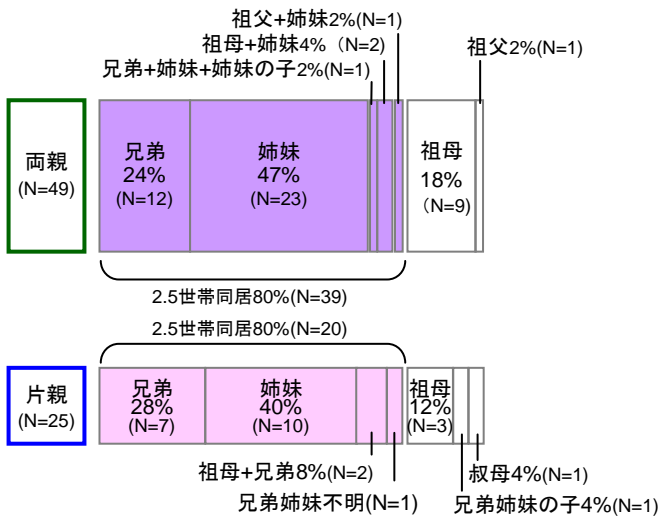
親族同居 (N=74)



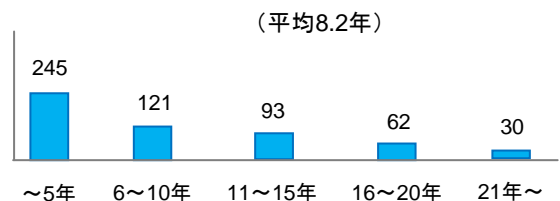
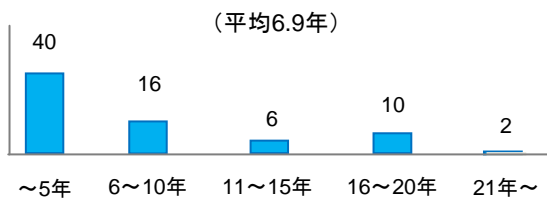
親子同居 (N=551)



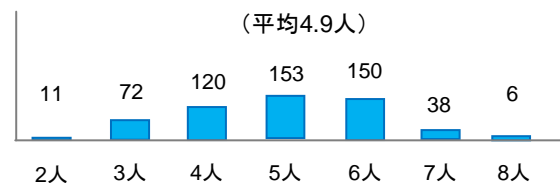
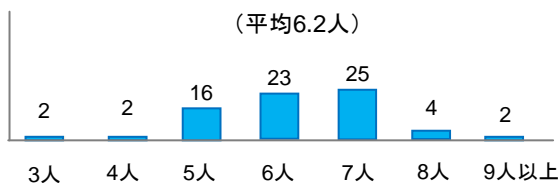
息子娘同居不明 両親 (N=3) 片親 (N=5)



■ 築年数



■ 同居人数



A

「親族同居」

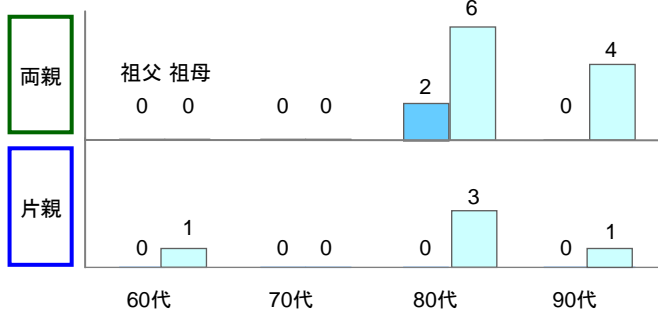
対象：親世帯と兄弟姉妹、祖父・祖母などの単身者、子世帯と同居している世帯

B

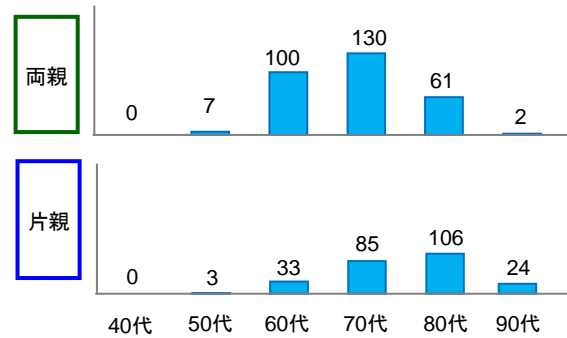
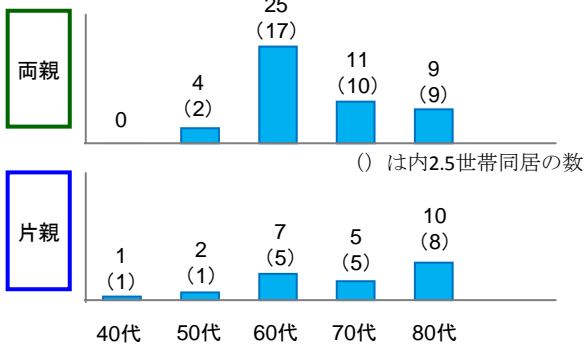
「親子同居」

対象：親世帯が両親または片親のみで、子世帯と同居している世帯

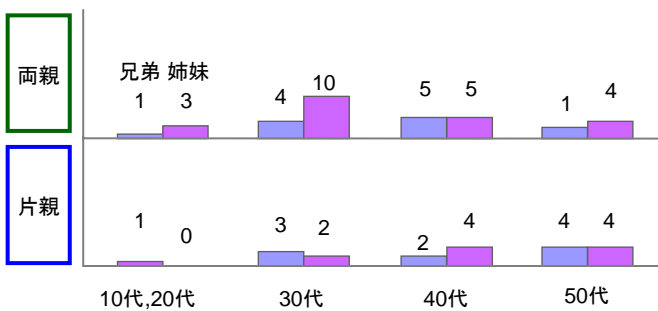
■祖父・祖母の年代分布



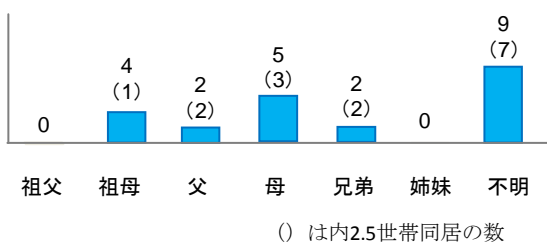
■親世帯父の年代分布（父がない場合は母の年齢）



■単身の兄弟姉妹の年代分布（2.5世帯同居）

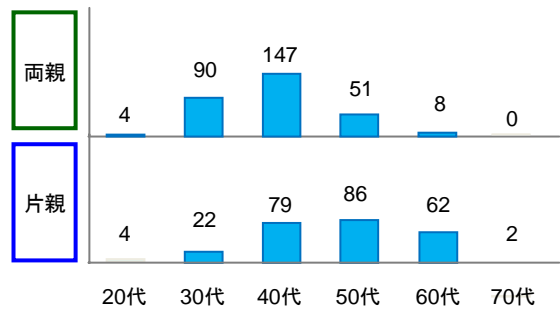
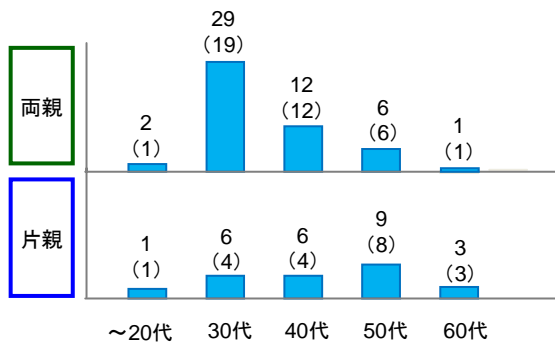


■介護、介助、見守りが必要な人

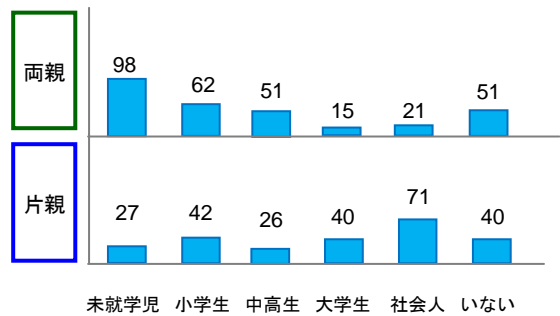
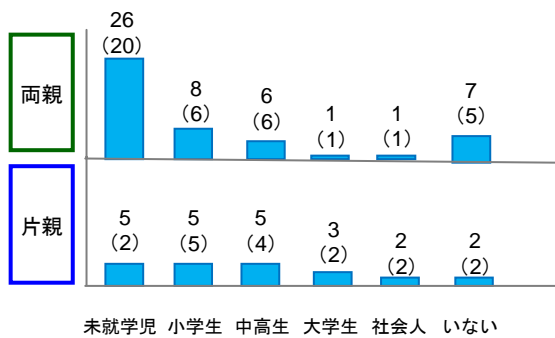




■ 子世帯夫の年齢分布（夫がない場合は妻の年齢）



■ 子世帯の末子学齢分布



■ ペットの有無

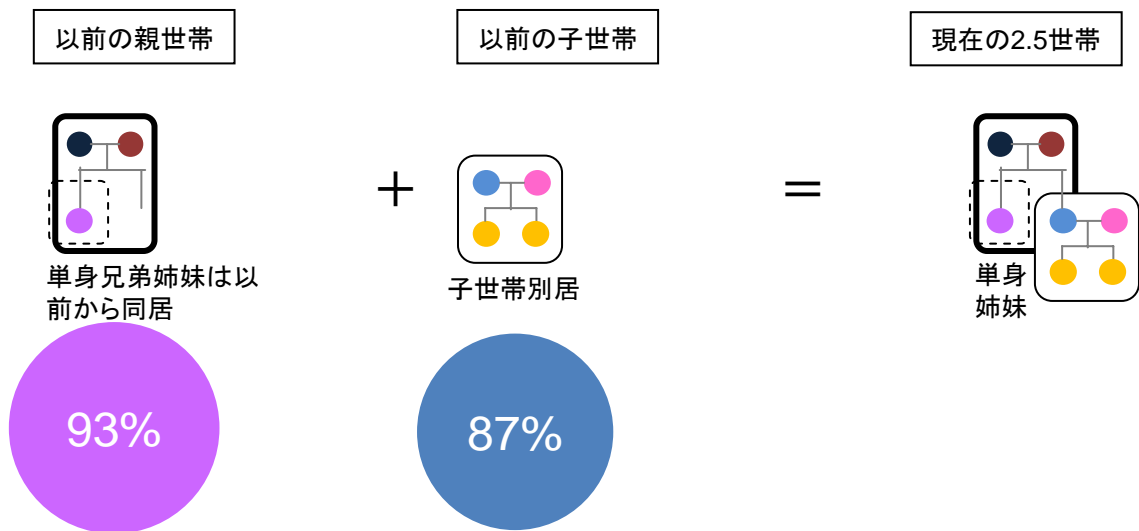
	いる	いない
両親	31% (N=15)	69% (N=34)
片親	48% (N=12)	52% (N=13)

■ ペットの有無（両親同居—片親同居）

	いる	いない
両親	23% (N=68)	77% (N=232)
片親	29% (N=74)	71% (N=177)

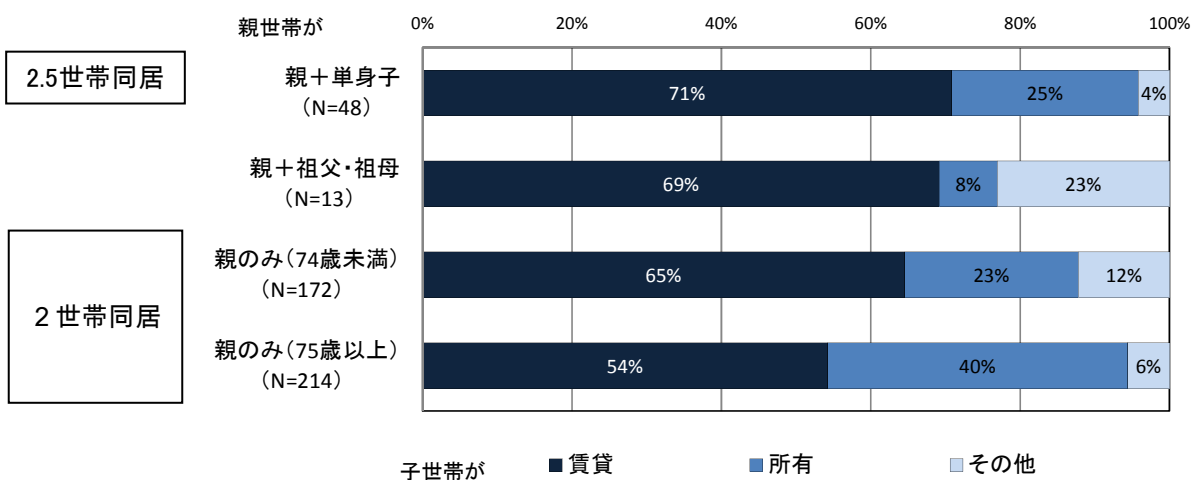
2-3. 調査 1 : 以前の居住状況

兄弟姉妹は従前から親世帯に同居しているケースが約9割、祖父母では約8割を占め、親世帯は以前の家族構成が新しい家にそのまま反映されていることが典型的です。逆に子世帯は別居していたケースが約8割を占め、独立した子世帯が戻ってくるための建替え、というのが典型的な構図といえます。

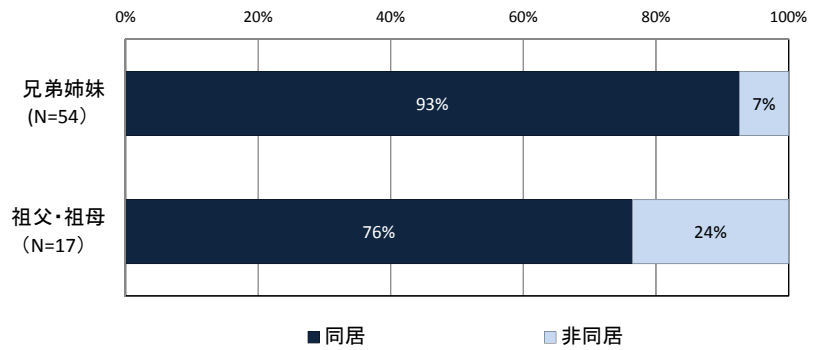


■親世帯子世帯が以前非同居の場合、子世帯の以前の住まいの形態

親世帯と別居していた子世帯は2.5世帯同居、2世帯同居と共通して従前賃貸住まいである率が高く、2.5世帯同居では約7割となっています。

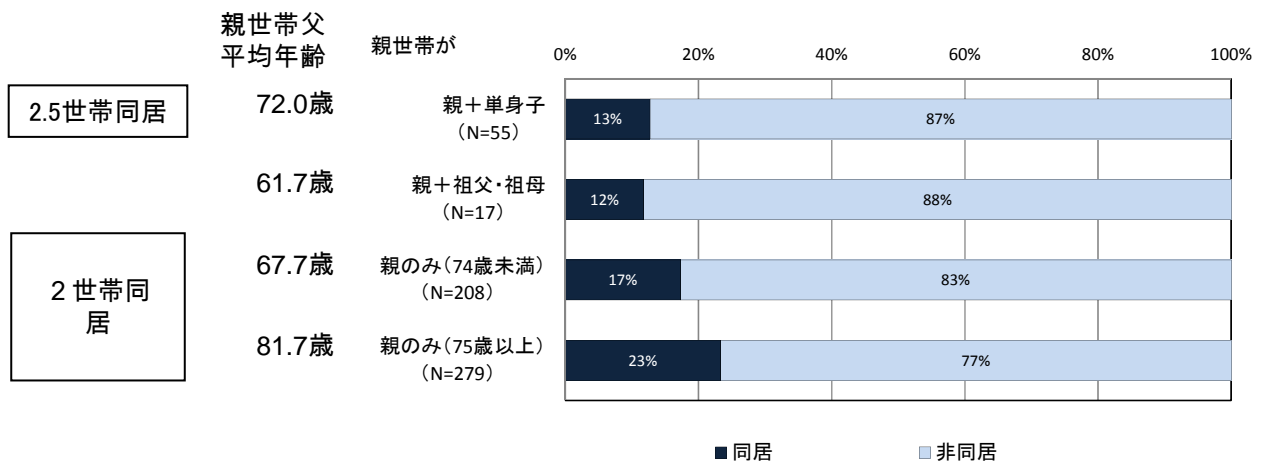


■ 単身の子、祖父・祖母の以前の同居形態



■ 子世帯と親世帯の以前の居住形態

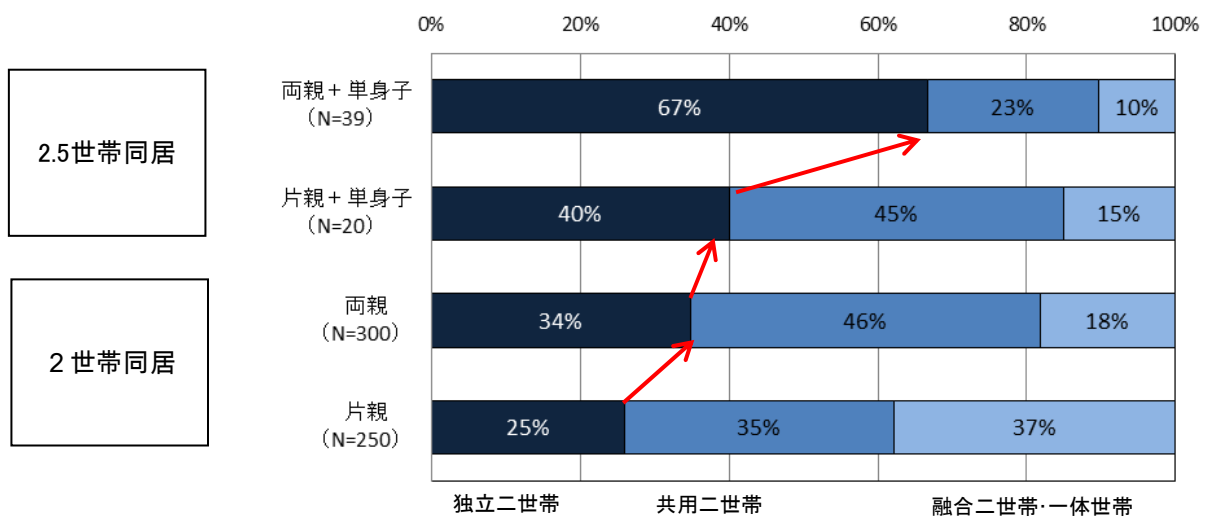
子世帯は以前は別居している割合が2世帯同居と比べて高い。



2-4. 調査 1 : 現在の居住状況

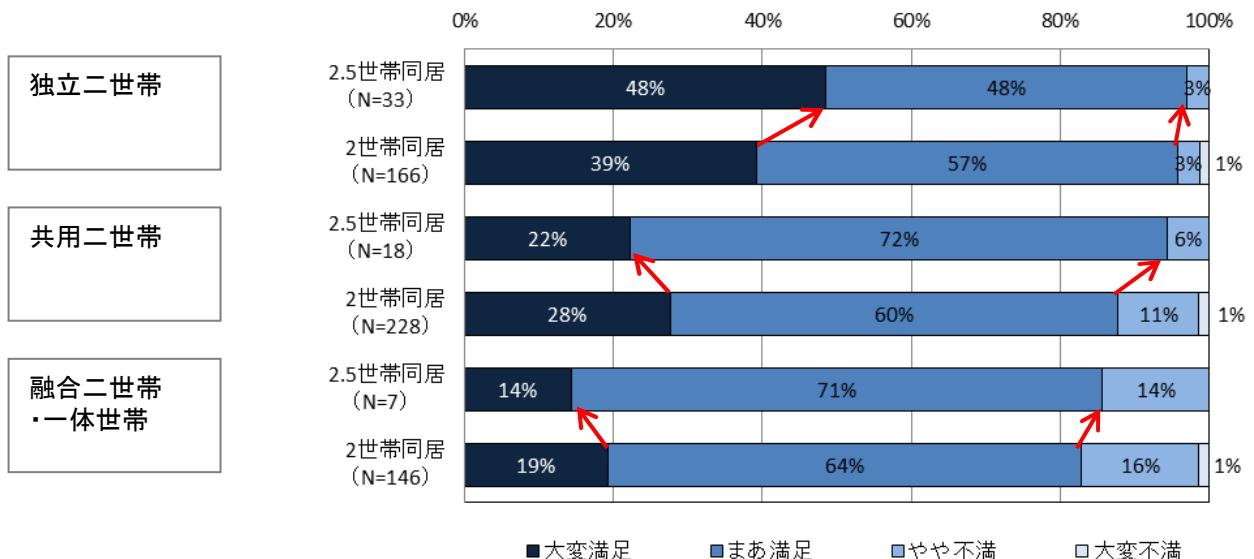
■2.5世帯同居は独立二世帯住宅の比率が高い

2.5世帯同居では2世帯同居と比較し玄関が2つある独立二世帯住宅の比率が大幅に多いのが特徴です。片親であっても2.5世帯同居の場合、母+姉のように2人以上で暮らすため、2世帯同居と比べ独立性の高い間取りが多くなっています。



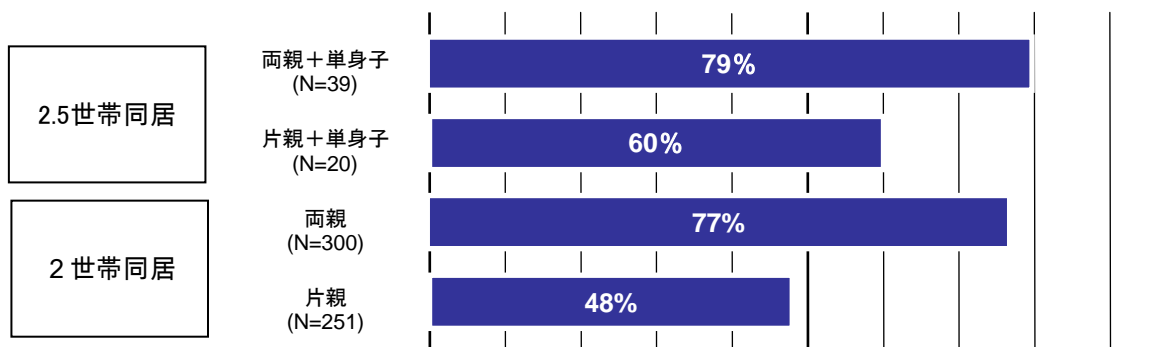
■独立二世帯住宅の同居生活の満足度は高い

2.5世帯同居の満足度は2世帯同居と比較し、独立二世帯住宅では高く、共用二世帯、融合二世帯・一体世帯ではあまり変わりません。2.5世帯同居の満足度は建物分離度の影響を受けやすく、独立二世帯住宅を提案の基本形と考えるのがよい、といえます。



■夕食の世帯別比率

同居スタイルの指標となる夕食の別々度合いを見ると、2.5世帯同居は2世帯に比べ両親の場合も別々の比率が高く、片親であっても親一人ではないため夕食が別々のままであることが多くなっています。



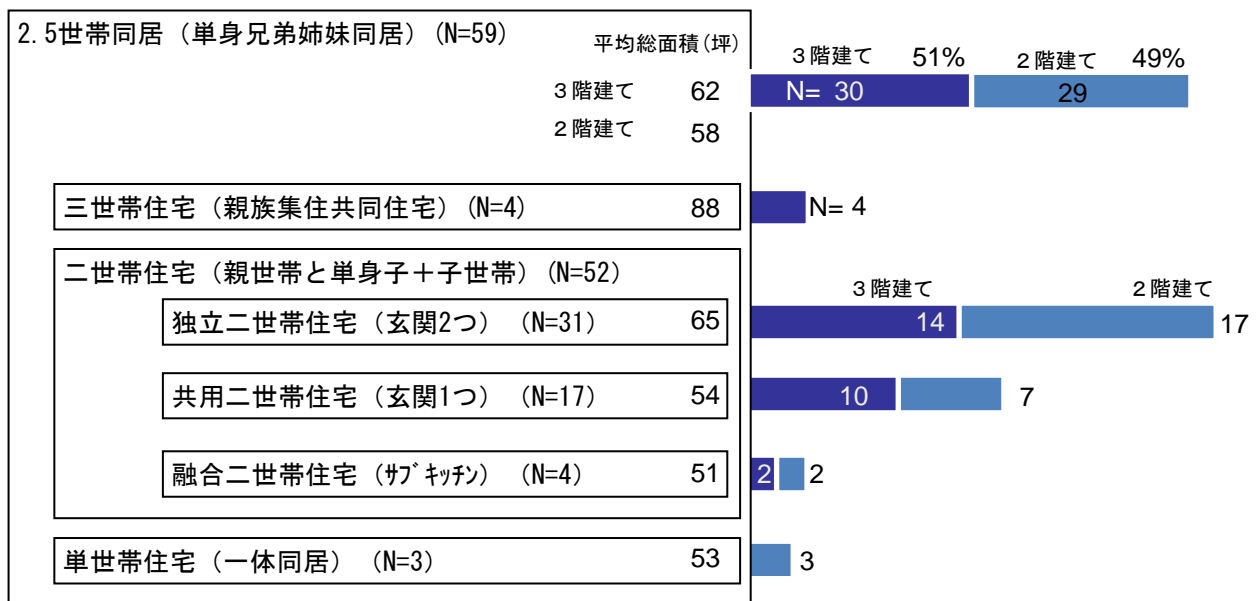
2-5. 調査 1 : プラン分析で見る同居シングル個室の位置

調査 1 の回答者の中から、兄弟姉妹が同居しているサンプル(N=59)のプランを分析しました。

3階建てが約半数を占めています。2.5世帯同居で分離度を高めるためには建替え前の住宅に比べ床面積も多く必要であり、カーポートスペースも必要なので3階のメリットが活かせるのだと思われれます。

キッチンが1つの単世帯住宅、3つの三世帯住宅は少なく、キッチン2つの二世帯住宅が大半を占めました。同居シングルの個室に着目してプランの分類と将来利用の検討を行いました。この結果、同居シングルの個室は親世帯の玄関近くが多く、子世帯からも近いBタイプの型が多いことがわかりました。この型は個室が空いた場合、子世帯の孫の部屋として使うことも考えられ、家族の増減に対応しやすい型といえます。

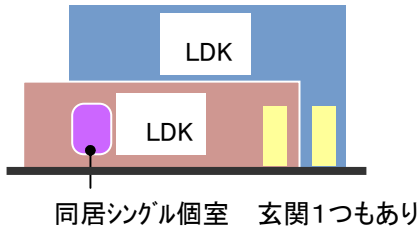
■2.5世帯同居のプラン分析



平均総面積(坪) : 当社プランNoベース、躯体で囲まれた総面積の平均。賃貸併用住宅は除く。

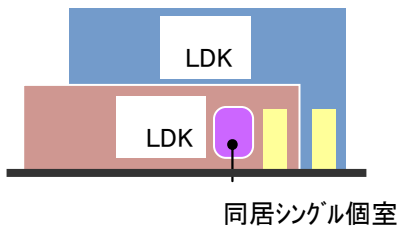
独立二世帯(N=31)・共用二世帯住宅(N=17)

代表的なタイプを挙げます。図は2階建てのケースを描いていますが、3階建てのサンプルも含まれます。



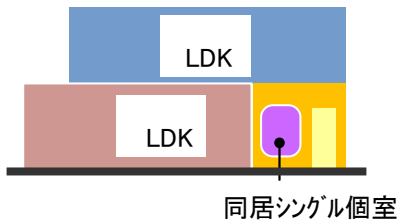
A: 玄関独立・共用二世帯: 親世帯LD奥(N=8)

子世帯から個室に行くには親世帯LDを通る場合
⇒空いたら親世帯のみが使う型です。



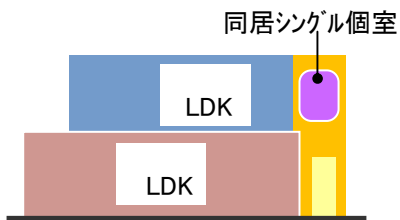
B: 玄関独立二世帯: 玄関脇(N=21)

子世帯から個室に行くには親世帯廊下を通る場合
⇒親世帯に加え、子世帯孫の個室としても使える型です。



C: 玄関共用二世帯: 共用部(N=10)

共用玄関ホールや廊下から個室に直接入れる場合
⇒親世帯子世帯両方の個室または客間として使える型。親世帯と共用部の境目が不明確な場合もあります。



D: 玄関共用二世帯: 子世帯フロア(N=7)

子世帯フロアの2階、または3階の部屋を使う場合
⇒空いたら子世帯の孫の部屋として使う型。孫共有ゾーンであれば親世帯が使うことも可能です。子世帯LDと同一フロアでも、うまくゾーニングすれば子世帯ゾーンの独立を保てます。

その他: (N=2)

融合二世帯住宅(N=4)・単世帯住宅(N=3)



主なLDを共用し、個室の一つに同居シングルが住みます。
子世帯の個室ゾーンの手前に置かれることが多いのが特徴です。

2-6. 調査2：居住形態別の意識調査の概要

■調査の目的

社会一般における2.5世帯同居と他の居住形態での意識を比較し、2.5世帯同居の特徴を明らかにすること。

■調査2：一般居住者への調査

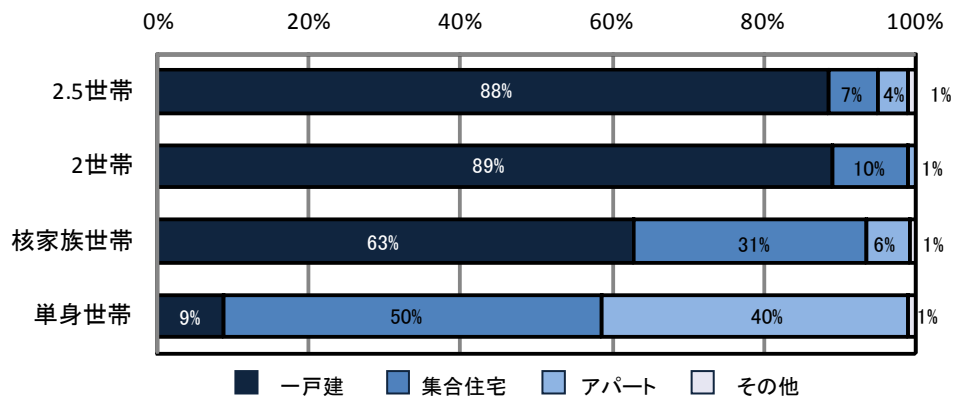
居住者調査で把握できなかった家族それぞれの意識、特に単身者の意識や、核家族単世帯や単身世帯での住まい方との比較を行うため、居住建物を限定せず一般のWeb調査を行いました。

- 調査時期：2012年6月
- 調査対象：20-69歳男女を住まい方別に割付
- 調査方法：Webアンケート（N合計=850）
- 調査エリア：全国

	親世帯		子世帯		単身者	
	父	母	夫	妻	男	女
2.5世帯	39	32	60	43	23	29
2世帯	52	52	52	52	-	-
核家族世帯	104	104	-	-	52	52
単身世帯	-	-	-	-	52	52

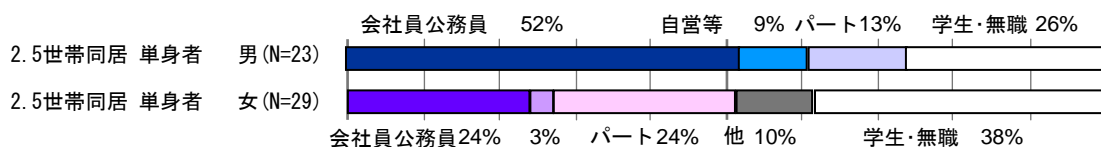
■居住形態

2.5世帯同居、2世帯同居では一戸建てが約9割を占め、単身世帯では集合住宅（マンション登）＋アパートで約9割を占めます。

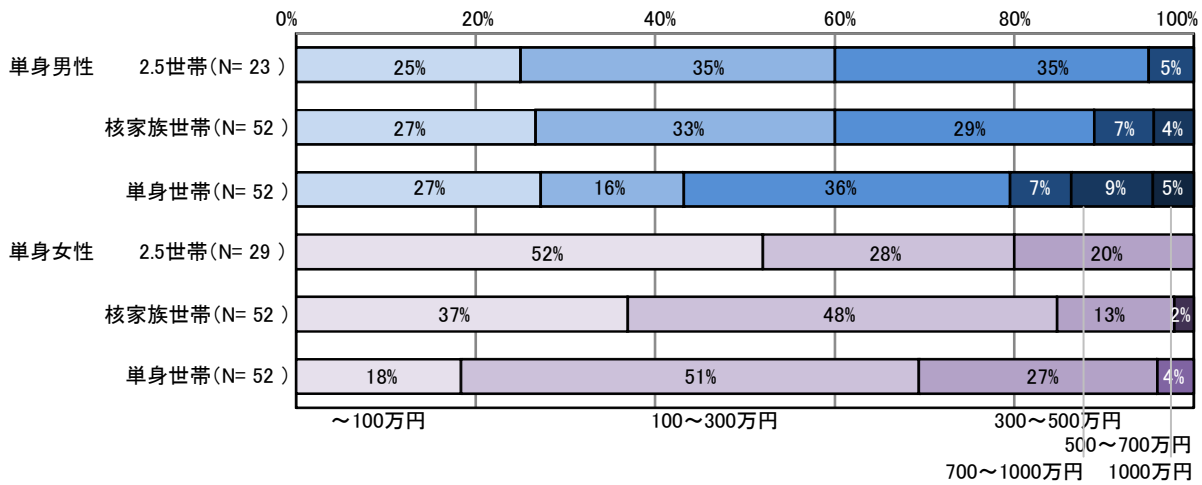


■就業状態

調査1、調査3と比べ、学生や無職を多く含む回答者になっています。

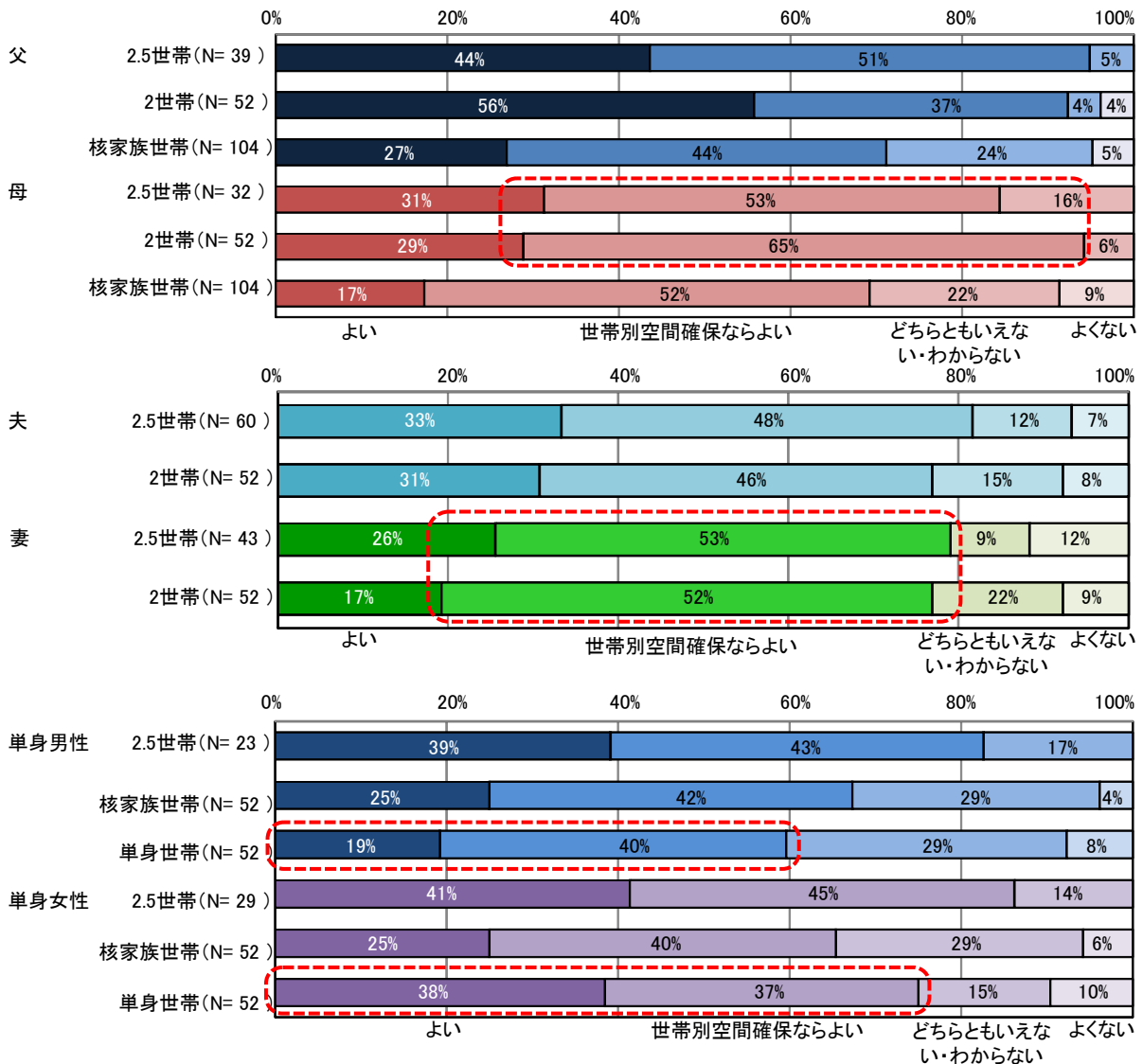


■ 単身者の個人年収



■ 2.5世帯同居の住まい方についてどう思うか

「世帯別の空間が確保できるならよい」が多く、特に親世帯母や子世帯妻にその傾向が強いようです。現状単身世帯であっても男の59%、女の75%はよい、または世帯別ならよい、と回答しています。



【住まいについてのインタビュー】

実際に2.5世帯同居している方に住み心地やメリットなどについて聞いてみました。
この調査の対象者はヘーベルハウス以外から選ばれています。

家族:ケースA

家族構成:親世帯、子世帯+子供、独身姉

大家族で住む良さとは？

子世帯 妻: 大勢で住んでいるため、一人になることはないので、寂しくない。

姉: 安心感は確かにある。

子世帯 妻: 一人暮らしとか一人でご飯を食べるとか、昼間はもちろん私一人のこともあるが、ずっと一人で暮らして一人でご飯を食べている私の母親などはやはり寂しそう。子供が1人しかいなくて大きくなり、夫が帰ってくるのも遅いという友達から「私は一人暮らしみたいなものよ」という話を聞くと、そういうのって寂しいのだろうなあと思う。うちは騒がしいがそういう寂しさはない。いろんな話が飛び交っているし、いろんな揉め事も持ってくるので飽きないというか面白い。楽しいことをみんなで共有できたり意見が言えたり、みんなであてもないこうでもないと言い合ったりあちらでケンカが始まったりというのも面白い。

生活費・光熱費の分担は？

子世帯 妻: 食費も光熱費も全部別。ただ、私達がローンを払っていることでとても気を遣っているのが、義母も義姉も、子供達に何か買ってきてくれたりお小遣いをくれたり、私達にお年玉をくれたりする。義母はお正月に夫と私に10万ずつねと、20万私にくれた。義姉も同じだけくれた。たぶんそうすることでローンと一緒に参加するとか、助けになればいいんじゃないかということで助けてくれているのだと思う。だから使わずにとってある。

同居のメリットは？

姉: やはり楽しい。たとえば誕生日を8回やる。8回ケーキを食べられる。イベントが増えたということ。

最近父の介護のことがあるので旅行は一緒には行けないが、私が1人で旅行に行くと両親を残していても弟達家族がいるから安心して出かけられる。もちろん普段の仕事にも安心して出かけられる。

震災後に感じたことは？

子世帯 妻: 私達というより夫が特に、実の両親がいてすごく良かったと思っただろう。安心。私の実母は一人で暮らしているので「こんな時は一緒に暮らしていた方が」と改めて思ったし、夫は一緒に暮らしているので「一緒に暮らしていてよかった」とたぶん改めて思っただろう。夫の両親もすごく心強かったと思うし、それは言葉でも言ってくれる。

母親は同居についてどう言っているか？

姉: 介護で楽しいことが少ない母にとって孫がいることはすごく大きいと思う。これが私達3人で、しかも私がほとんど外に出ていて夫婦2人となると、すごいストレスになると思う。今でさえストレスはすごいと思うので。もちろん子供達も下に来るし、父の愚痴も義妹が聞いてくれてやさしく接してくれているので、一緒に住むことでみんなのストレスがかなり軽減されていると思う。

2. 5世帯のメリットは？

親世帯 夫：何かあった時に送って行ってもらえたり、留守番してもらえる。

妹と同居していて助かることは？

子世帯 夫：妻も免許を持っているが、私の車がマニュアルなので乗らない。ちょっと車で送り迎えしてほしいという時には父も妹もいるのでどちらかに頼んで出かけたりできるのは助かる

2. 5世帯同居していることのメリットは？

子世帯 夫：だいたい誰かしら家にいるのでちょっと夜の帰りが遅くなりそうなら「お風呂入れといて」とか、雨が降りそうなら「洗濯物入れといて」とか、そういうことができるのが良い。お互いそういうことをし合っているので、持ちつ持たれつという感じがよい。

子供と義妹の関係は？

子世帯 妻：子供にどこかへ連れて行ってと言われても行けない時に「マナちゃんにお願いしてごらん」と言って連れて行ってもらったり、下の子が行きたかったコンサートに私が行けなくなり、代わりにコンサートに連れて行ってもらったりした。上の子もよくボーリングに連れて行ってもらっている。

震災を経て今の住まい方が良かったと思うことはあるか？

妹：助けてもらえる人が多いのはやはり安心。親だけでなく兄達の世帯も自分がいなければいけないと認識してくれる。そしていざとなれば迎えに来てもらったり情報を教えてもらったり、そういうのは良いと思う。

今の住まい方で楽しいと思うこと？

妹：(家族とは)多少自分の好きなことが合うところがあり、そういうことをしゃべれる人が家の中にいるということ。兄もそうだし、子供達とも部分部分で合うところがあり楽しい。

同居の金銭的なメリットは？

親世帯 妻：ローンのことは建てる時に、退職するまでは私達が払うからという話し合いをした。ちょうど退職して切り替えの時に書き換えた。金利的にもちょうど安くなってきていたから良かった。

同居していることのメリットは？

子世帯 妻：お金の面では、おじいちゃんおばあちゃんにちょっと助けてもらっているところもある。例えば、ケーブルテレビも自分で入ると高いので「おじいちゃん、入らない？」と言って入ってもらう。光熱費も子供が大きくなると夜中まで起きているのでかかるので、それをちょっと負担してもらったりしている。

同居によってお金が貯まる、使えるお金が増えるという金銭的メリットはある？

妹：それはある。

親が子供を叱った時、他の家族という逃げ場があるのは子供にとって良いことか？

子世帯 妻：私が怒っているのも聞こえているようで、ものすごく怒っていると「どうしたの」とここへ来る。そして事情を聞いて「それはあんたが悪い。怒られて当たり前だ」とか、「下において、お菓子あげるから」と慰めてくれたりとか、こちらも気分転換になる。以前住んでいたアパートでは逃げ場がないからどうしよう、子供を虐待してしまうかもしれないと思ったりしたが、今はおばあちゃんが面倒をみってくれるので1人になって落ち着くことができる。

2-7. 調査3：ワーキングシングル女性調査の概要

■調査の目的

ワーキングシングル女性の意識を把握し、2.5世帯住宅の提案に活かすこと。

■調査3:ワーキングシングル女性への意識調査

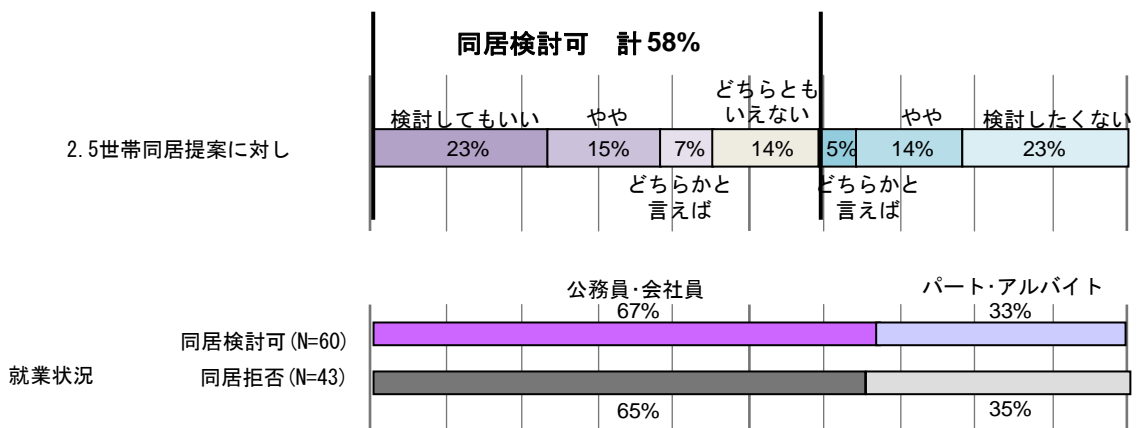
両親と弟夫婦が居る40歳前後のワーキングシングル女性に対して意識調査を実施しました。

- 調査時期：2012年6月
- 調査対象：両親と結婚した弟が居る38-42歳の働く単身女性
- 調査方法：Webアンケート（N合計=103）
- 調査エリア：全国

■約6割が両親・弟夫婦と同居する提案があれば検討可能

両親や弟夫婦から同居の提案があったとき、「検討してみてもいい」（やや、どちらかといえ
ばを含む）と「どちらともいえない」の合計を「同居検討可」とします。同居メリット項目を
認識後の同居検討可能者は約6割居るので、以後の分析では同居検討可能者と拒否者の比較を
中心に行います。

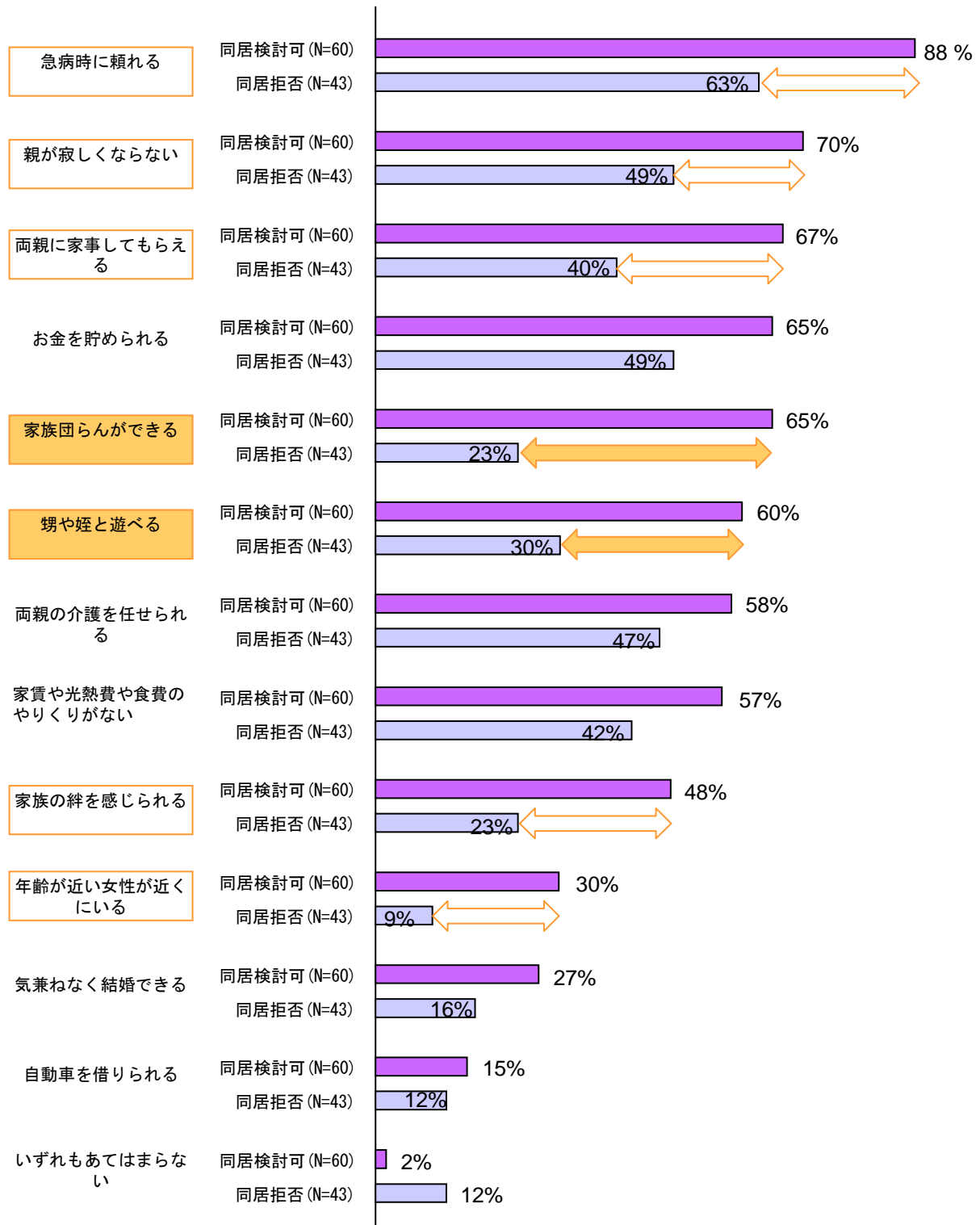
就業状況では、どちらも公務員・会社員が2/3を占めており、大きな違いはありません。



■同居メリットに対する魅力度

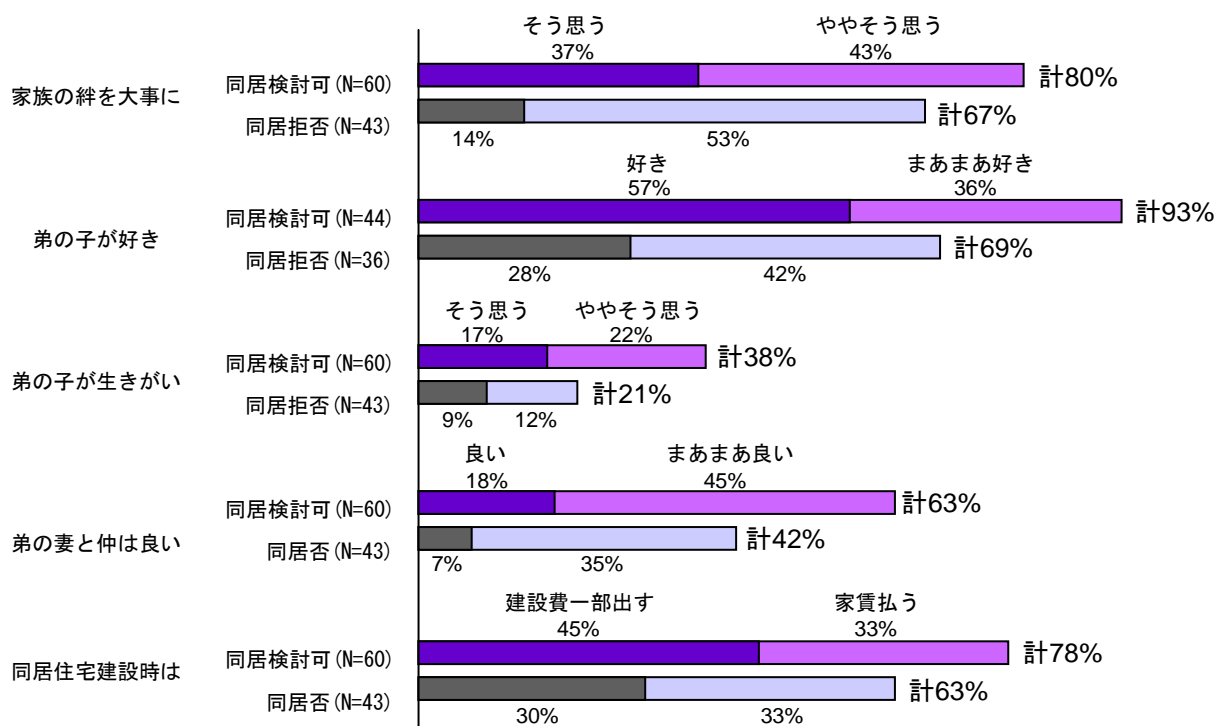
同居検討可能者の方が全体に提示した同居メリットに魅力を感じています。

一位は「急病時に頼れる」で、一人暮らしの不安の裏返しと思われる。以下上位には精神的、家事依存、経済的等の分野のメリットが並びますが、家族団らん、子と遊ぶなどの家族交流の項目が高いのが同居検討可能者の特徴です。逆に同居拒否者は「お金を貯められる」「家賃、、」等経済的なメリット、急病時や介護など対応での魅力は認識しつつ、家族で集まって住む楽しさを感じていない傾向があると言えます。



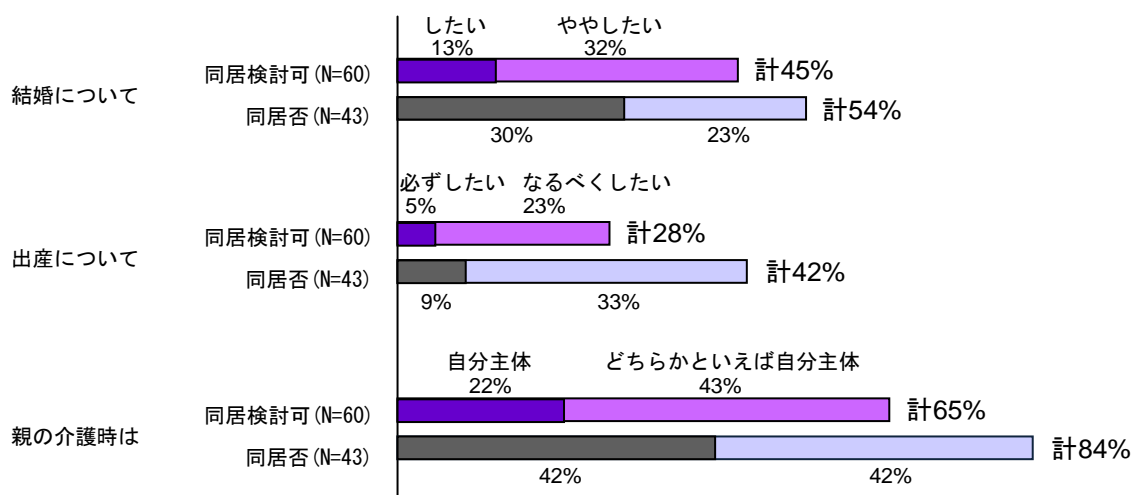
■同居検討可のワーキングシングル女性は、家族と仲が良い

同居検討可能者の特徴として、弟家族、特に子どもを好きであることが挙げられます。また、今の家族との絆を強めようという意識も高い傾向があります。



■同居検討可のワーキングシングル女性は、出産意向が低く、親の介護は弟夫婦と協力的志向

同居検討可能者の方が結婚、出産願望が低くなっています。また、親の介護を自分主体で、という覚悟も同居拒否者ほど強くはありません。しかし弟任せという意識ではなく、前頁で約6割が弟夫婦の介護参加を同居の魅力と感じていたことも合わせると、家族協力して介護、という意識が強いのではないかと推測されます。



第3章 2.5世帯同居の特徴—2世帯同居との違い

3-1. 2.5世帯同居のストレスとメリット

■女性の方がストレス、メリット共に多い

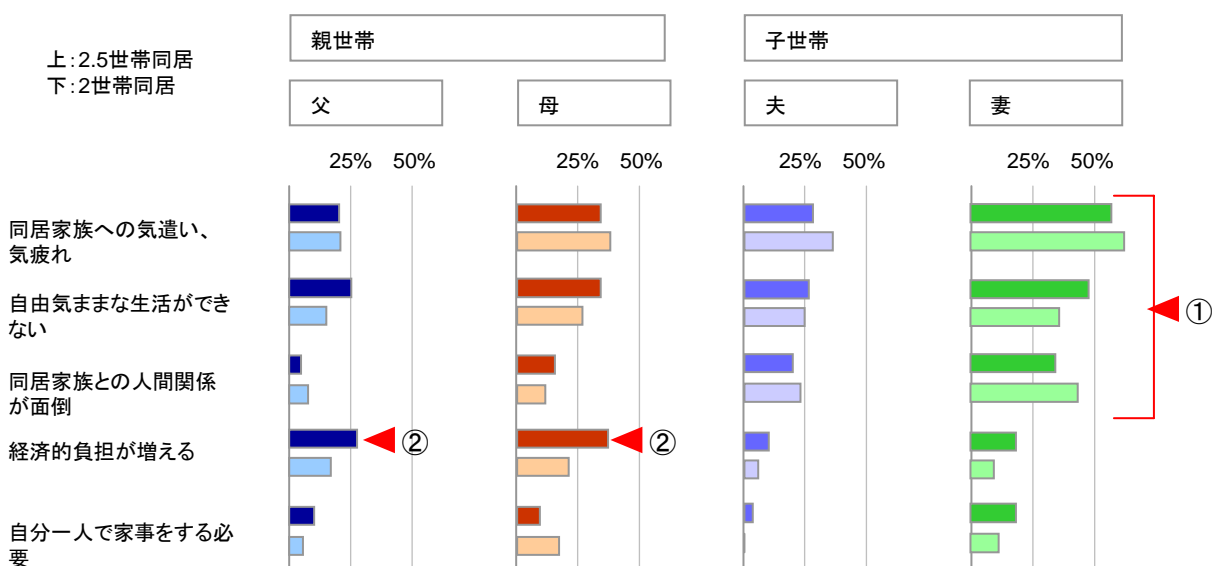
「現在の住まい方をしている困ったり嫌だと感じること」では、同居家族への気遣い、2.5世帯同居、2世帯同居共通で気疲れが最も多く、上位項目には不自由や人間関係の項目が並び、特に子世帯妻で高くなっています。単身の女性で2.5世帯同居場合もこのストレスが見られ、この「気兼ね気苦労」のストレスを減らすことが必須と言えます。子世帯、同居シングル共、独立した日常生活空間を確保することで、気遣いを減らすことが出来るのではないのでしょうか。

実際に同居シングルがいて感じることとしては「困った時に助かる」が家族共通の1位です。親世帯子世帯の関係が円滑になる、も上位を占め、第三者的立場の人が居ることが、集居の暮らしにはメリットとなることを示すものと言えます。家事分担は男性で上位、子どもの教育によいは父と子世帯妻で上位となっています。

現在の生活で感じるメリット（次ページ）で2.5世帯同居の特徴を見ると、女性を中心に家族集居、精神面のメリットが強く感じられている傾向があります。特に、「自分のライフスタイルを守りつつ」「自分の自由な時間が持てる」と感じていることが2.5世帯の親世帯母の特徴です。一方、デメリットとして自立面での評価の低さがあり、ここに対する提案が必要です。

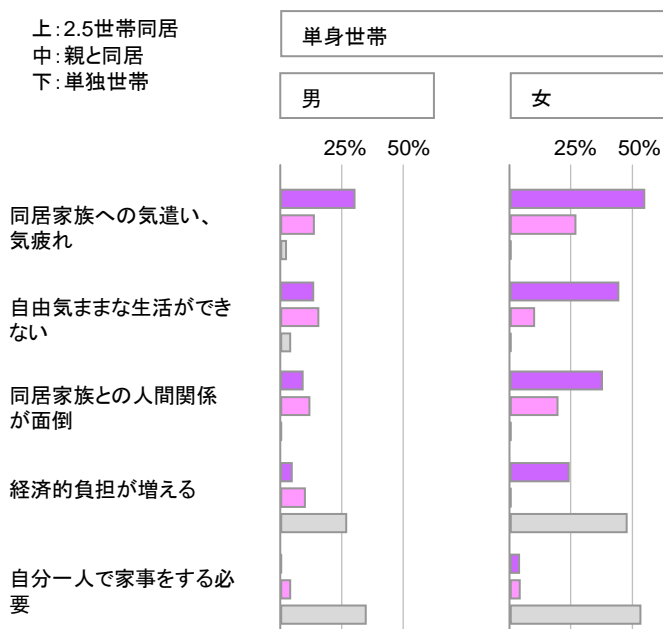
■親世帯・子世帯回答：現在の住まい方をしている困ったり嫌だと感じること（調査2）

現在の住まい方でのストレスとして、①子世帯妻に「気遣い」「人間関係」の回答が多いのが特徴です。また、②親世帯父母に、「経済的負担」が挙げられています。



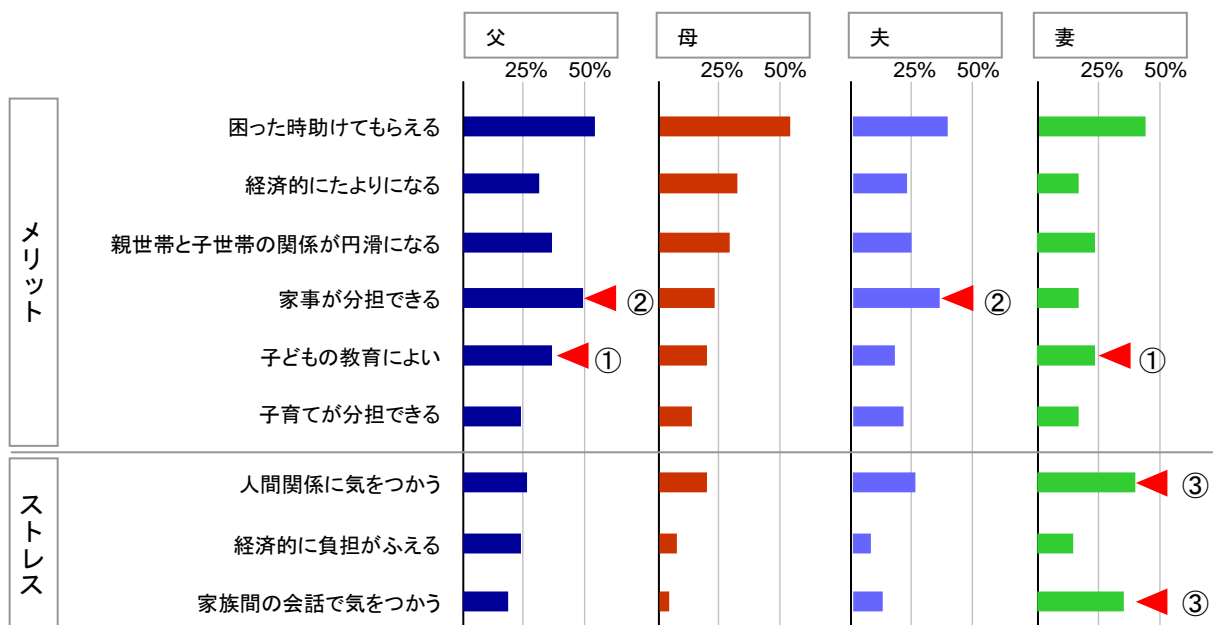
■ 単身者回答：現在の住まい方をしていて困ったり嫌だと感じること（調査2）

現在の住まい方でのストレスとして、単身者の側では2.5世帯同居と核家族同居では「気遣い」「不自由」「人間関係」が挙がり、特に2.5世帯同居の女性で多くなっています。一方で単独世帯では「経済的負担」「家事負担」が挙がり同様に女性に多くなっています。

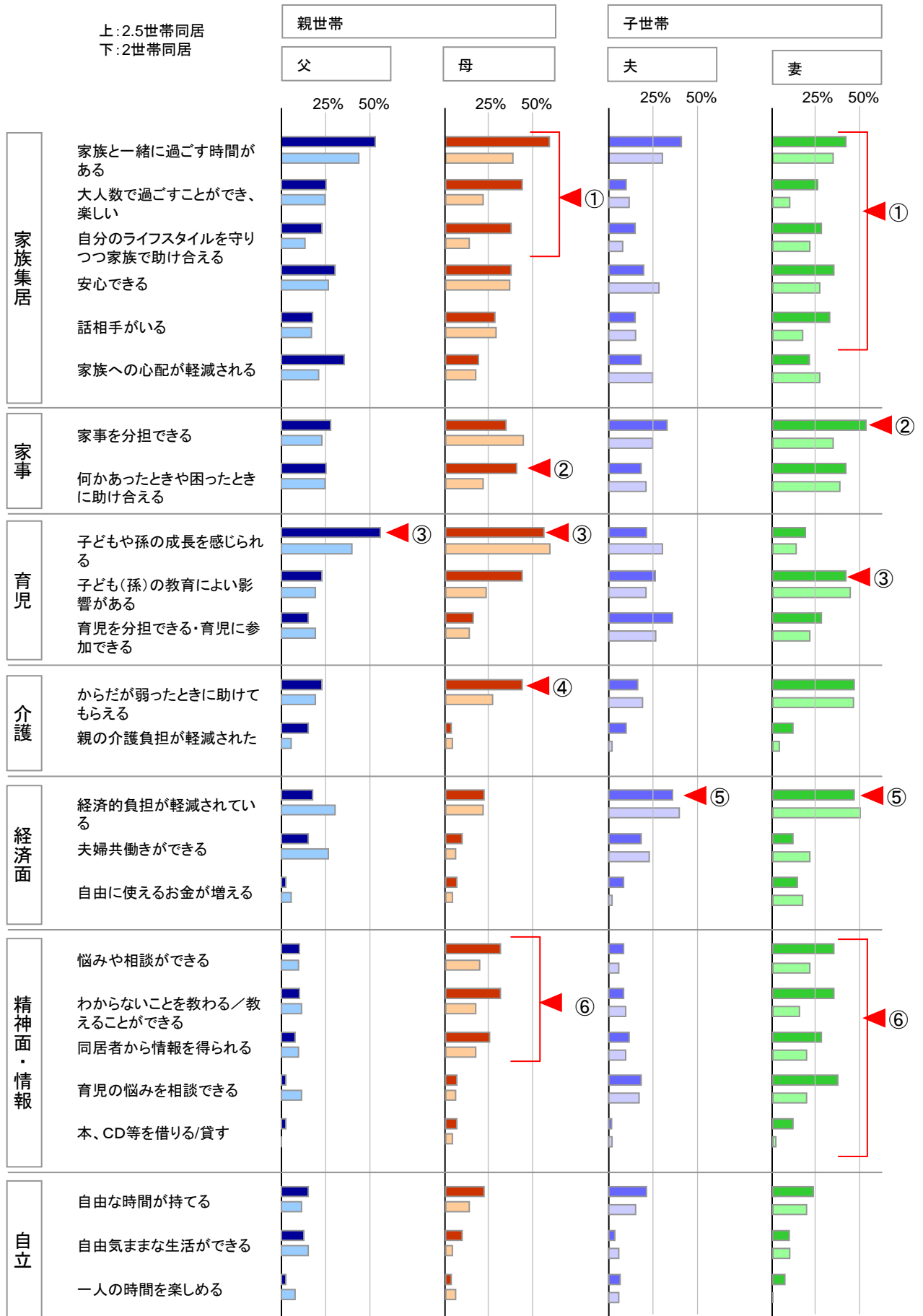


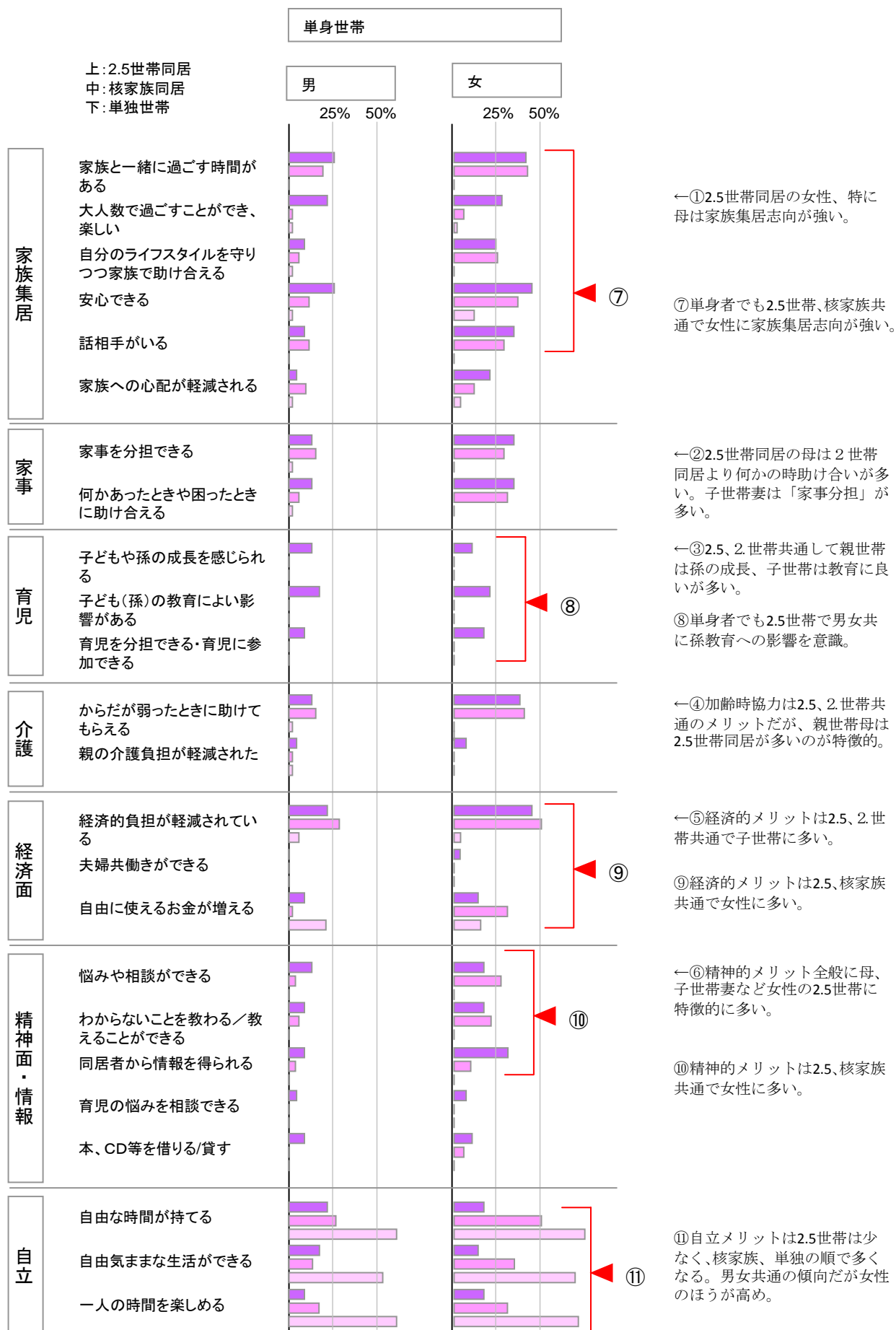
■ 実際に単身の兄弟姉妹が同居して感じること（調査2 2.5世帯同居者回答）

一方、単身者と同居している2.5世帯同居の親世帯・子世帯は、兄弟姉妹の同居によって「困った時助かる」が共通して挙がっています。①「家事分担」や「子の教育によい」にメリットを感じ、②家事分担のメリットは男性に多いのが特徴です。また、子世帯妻にはやはり③気遣いや人間関係のストレスが多く挙げられます。



■現在の住まい方をしている良かったと感じること（調査2）





3-2. 集居をより楽しむ仲の良い家族

2.5世帯同居と2世帯同居とを比較すると、2.5世帯同居では集居をより楽しんでいる傾向が見られます。

2.5世帯同居のメリット・デメリットでも、自由な生活であり人間関係に気苦労がないのであれば、家族と一緒に過ごす安心感に高い支持が集まっていました。集まっていることを楽しむシーンとしては家族集まっての食事が代表的です。

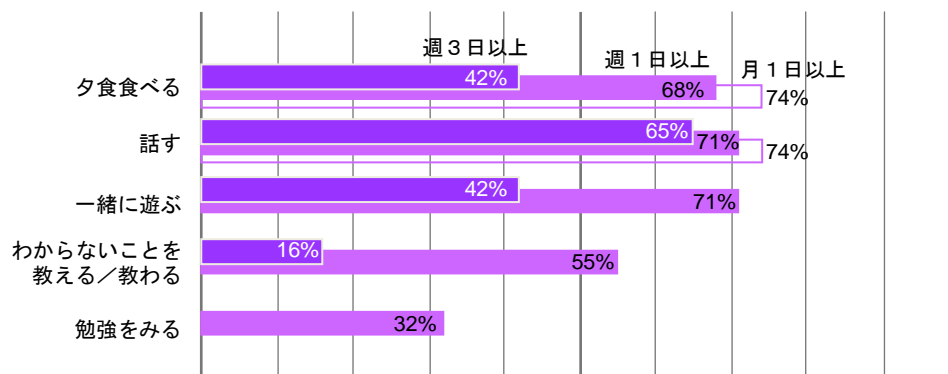
■同居家族が集まって食事をする機会（調査1-追加調査）

2.5世帯同居（同居シングルが兄弟姉妹）の回答で、普段の食事が別々の方全員がイベント的な食事を年数回しており、月1回以上の方も半分居ました。



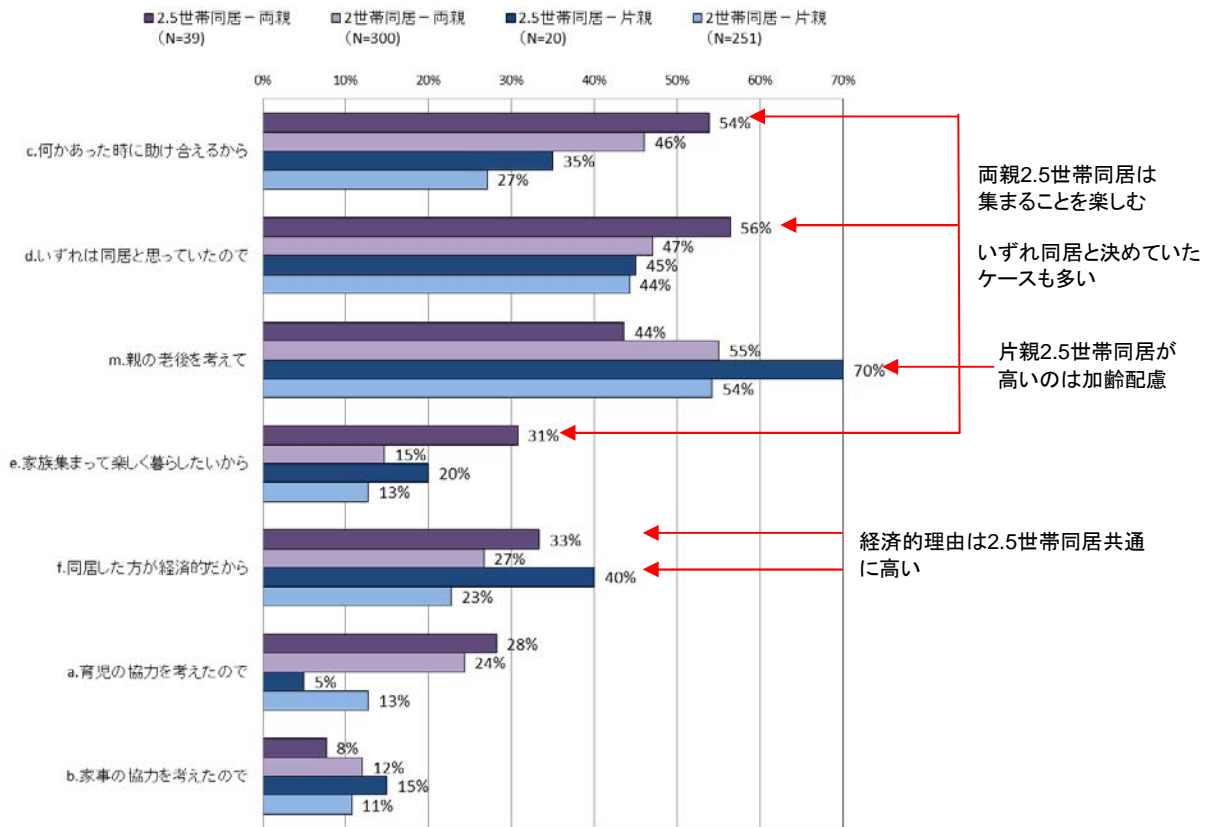
■同居シングルが姪や甥とすることの頻度（調査2）

同居シングルと子世帯の孫（甥や姪）との関係を調査2から見ると、話す、遊ぶ、教え教わる、勉強を見るなど様々な関わりがあることが分かります。この調査では普段から夕食一緒の例がヘーベルハウスより多くなっており、生活空間の分離はあまりされていないことが推測できます。



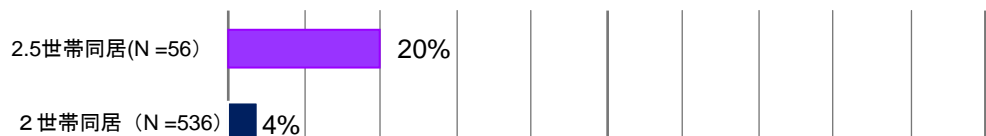
■家づくりのきっかけ（調査1-AB）

家づくりのきっかけでは、両親の2.5世帯同居は「集まって楽しく」が10Pt以上高く、集居を楽しみ、困った時に助け合う傾向が強いです。片親になると、息子夫婦である子世帯の責任感と、老後の心配解消の比重が増えてきます。



■他世帯の車を借りることがある（調査1：運転する方のみ）

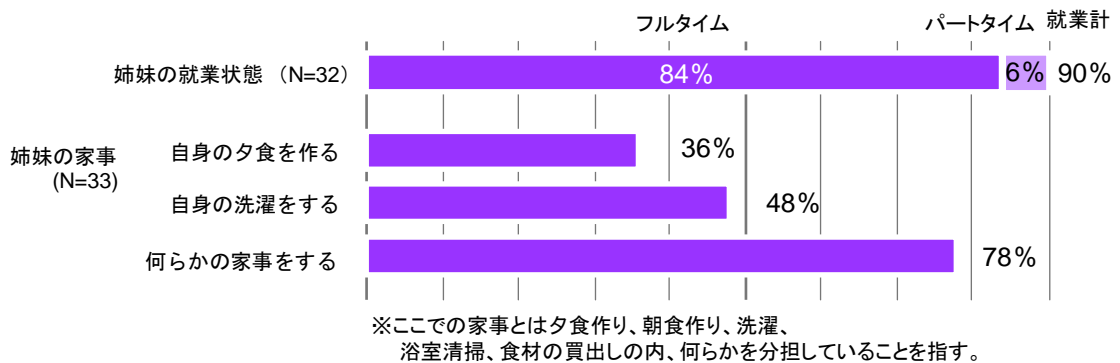
2.5世帯同居では、他世帯の車を借りる、すなわちカーシェアリングのような使い方が増え2世帯に比べて増えます。2.5世帯同居での全11例の内訳は同居シングルが借りるのが6件と最も多いのですが、親世帯が2件、子世帯が3件あり、2.5世帯で車を1-2台、という使い方が多様にあることがわかります。



3-3. 就業状態：女性の社会進出が進む

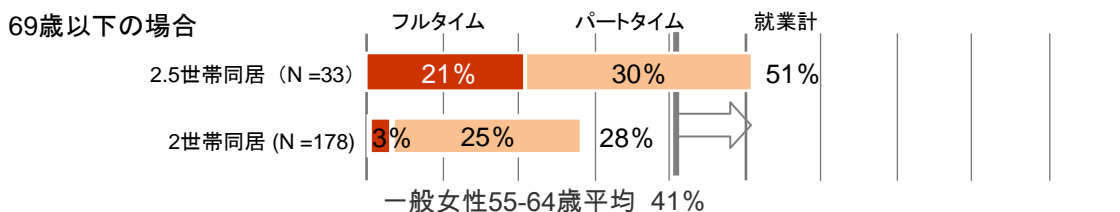
■姉妹の就業状態としている家事：ワーキングシングルでも家事はしている（調査1）

親世帯の単身でいる女子は、ほとんどがフルタイムで仕事をし、家事は夕食で約6割は親世帯母に依存しているものの、自分の洗濯等ある程度の家事をしています。何らかの家事をしているケースは8割近くあり、仕事中心ながらある程度の家事も出来る、といえるでしょう。パラサイトシングルではなく、ワーキングシングルと呼ぶのがふさわしいと思います。



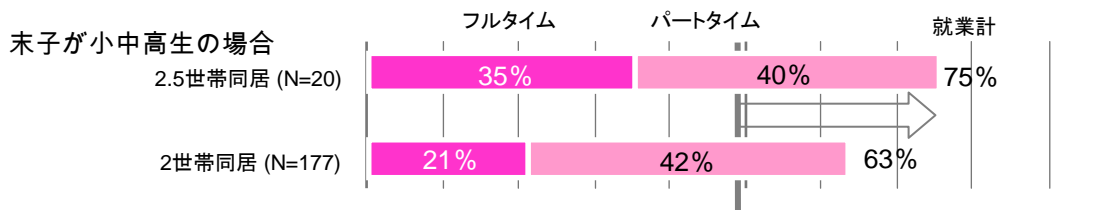
■親世帯：母の就業状態：2.5世帯同居は働く母が多い（調査1）

親世帯の母の就業率を2.5世帯同居と2世帯同居を比べると、2.5世帯の母(69歳以下で分析)は一般の平均と比較しても就業率が高く、一方で二世帯同居の母は大幅に低くなっています。2.5世帯ではワーキングシングルがいざという時の代役を務めることができ、これが母の就業を助けていると思われます。逆に2世帯同居では、母が子世帯を含めた2世帯分の専業主婦として家事を支えているのではないかと思います。



■子世帯：妻の就業状態：共働きが増える（調査1）

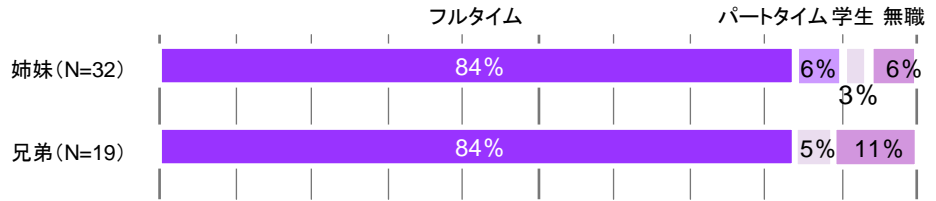
子世帯の共働きは2.5世帯同居、2世帯同居共通に多く、親世帯母が働いていることでの子世帯の共働き率低下はみられません。末子が幼児期を除いた小中高生の世帯に絞れば2.5世帯同居が多い傾向になります。



※一般データは内閣府男女共同参画局「女性のライフプランニング支援に関する調査報告書」より

■ 単身兄弟姉妹の就業形態（調査 1）

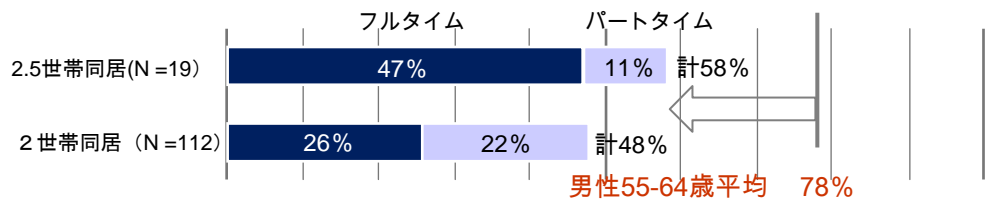
兄弟姉妹でフルタイムの比率が変わらず、男女差が見られません。



※要介護の兄弟を除く

■ 親世帯父の就業形態：69歳以下の場合（調査 1）

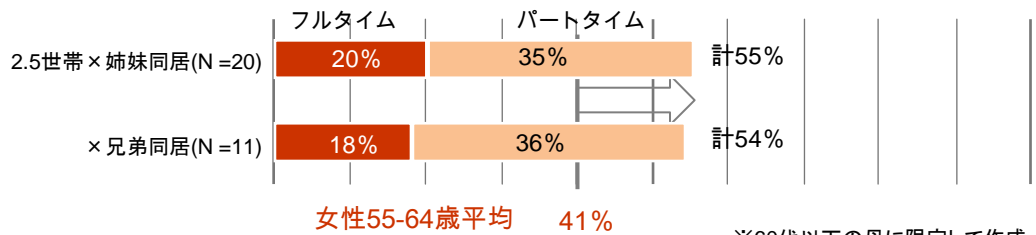
一般より低い傾向にあり、農林業、自営が少なく元雇用者の比率が高いためと推測されます。



※60代以下の父に限定して作成

■ 親世帯母の就業形態：69歳以下の場合（調査 1）

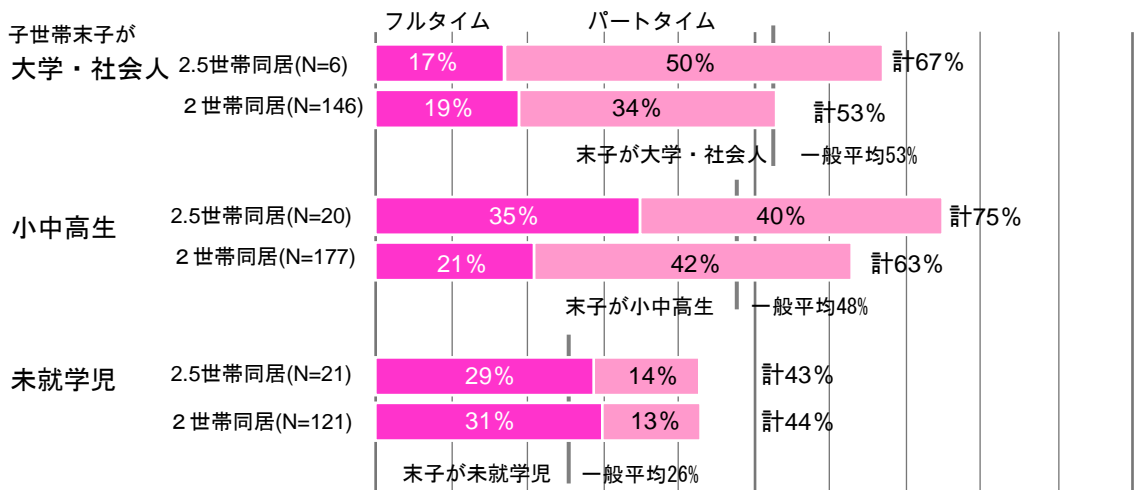
兄弟・姉妹同居共に変わらず、男性であっても母に頼らず生活しているように思われます。



※60代以下の母に限定して作成

■ 子世帯妻の就業形態：末子学齢別（調査 1）

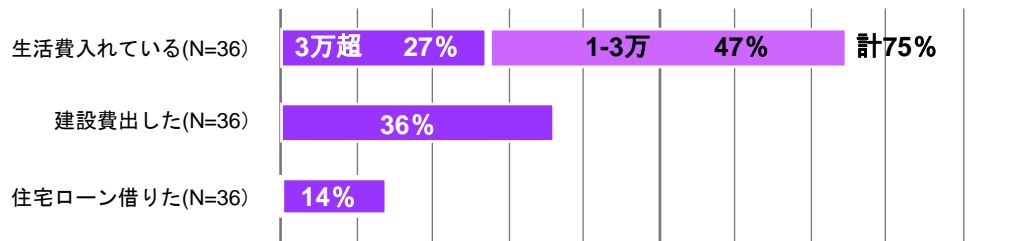
子世帯の共働きは2.5世帯同居、2世帯同居共通に同じ立場の一般女性より多く、親世帯がサポートしている効果と考えられます。小中高生以上では2.5世帯同居の方が高い傾向にあります。



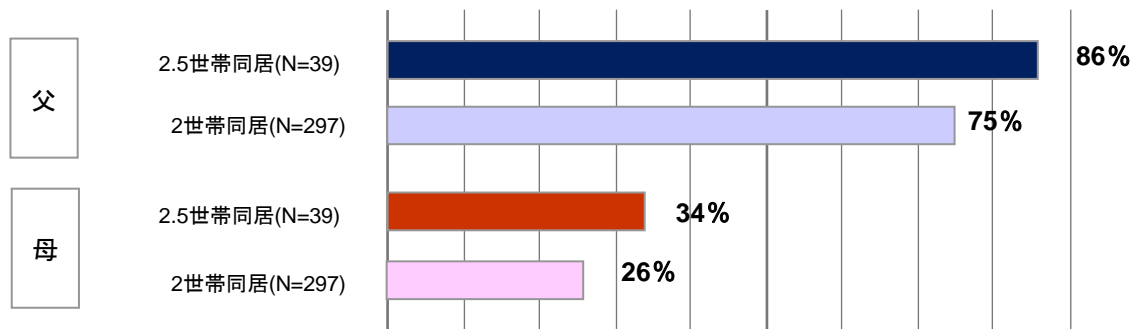
3-4. 資金結集：家族の資金を集めた家づくり

2.5世帯同居では、同居シングルである姉妹の3/4が実家に生活費を入れ、約4割が建設資金の一部を出しています。また、2世帯住宅では親世帯の土地に、子世帯がローンを利用し建物の資金を多く負担して建てるのが一般的ですが、親世帯父母が建設資金を出す比率は2.5世帯同居の方が高くなっています。つまり、2.5世帯同居では子世帯のローンだけではなく親世帯やワーキングシングルである姉妹からの資金が加わり、家賃として毎月ローンの負担を軽くなるようにお金が家族内で動いている場合が多いのです。

■姉妹の経済貢献（調査1）



■親世帯の建設資金提供（両親の場合）（調査1）



経済協力の内容（調査A追加調査より）

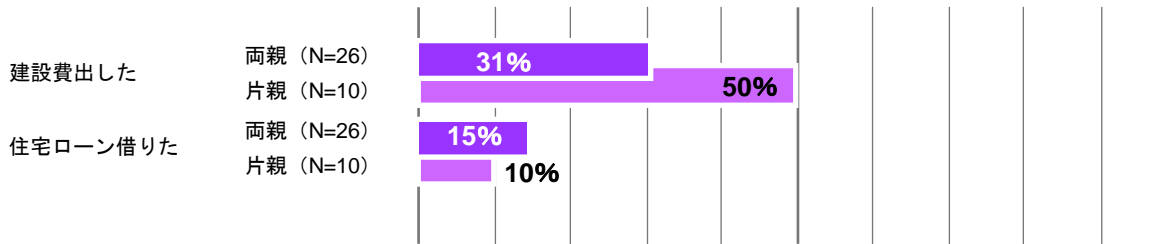
住宅ローンを折半で支払っているのが経済的。(母+妹/息子夫婦+孫2人)

生活費(食費、光熱費、など)を子世帯に渡している。余れば返金がある。(父母+妹/息子夫婦+孫2人)

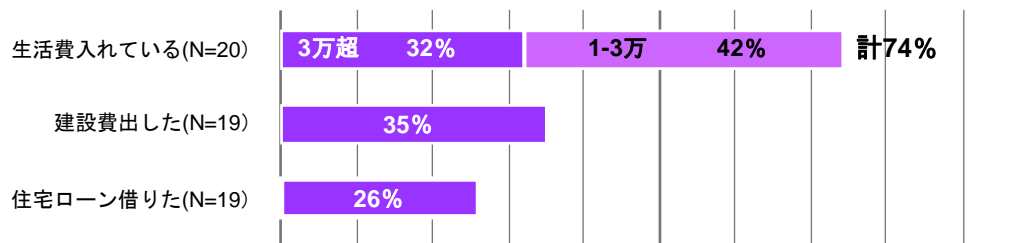
父の介護や、ダウン症の孫を皆で助け合って生活しようと親世帯で同居を言い出した。建築資金は全て私が負担し、長男世帯は、アパートの賃貸料同額を将来の修繕積立金と固定資産税に回すこととした。(祖父+父母+妹/息子夫婦+孫2人)

■姉妹の経済貢献(両親片親の差)

片親同居の場合、高年齢化することもあり、姉妹の経済貢献はより強まる傾向が見られます。



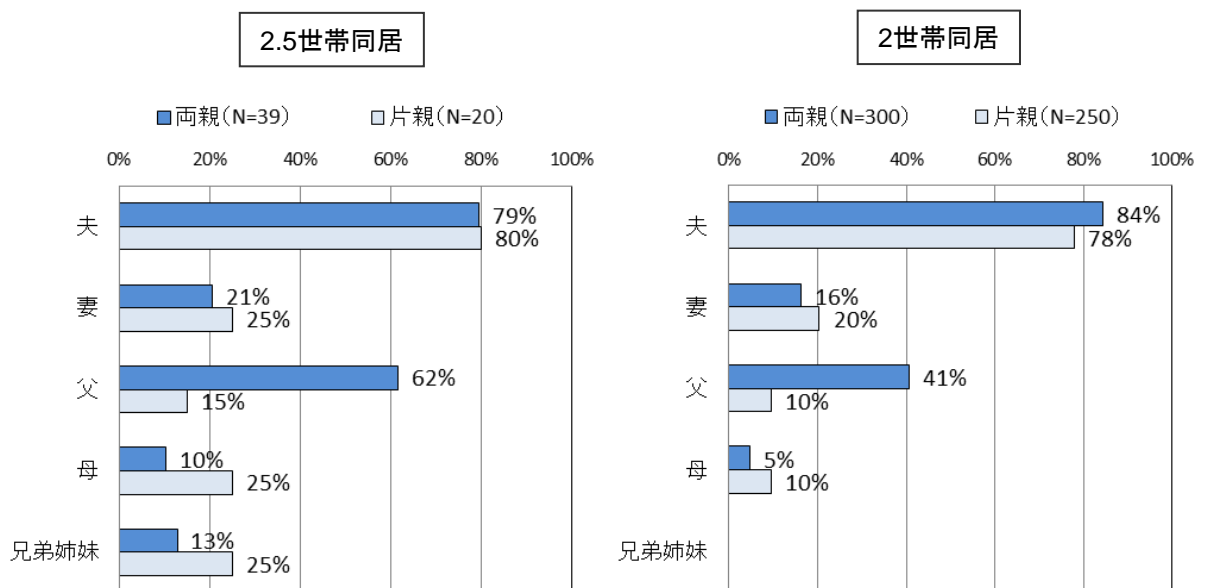
■兄弟の経済貢献



※要介護の兄弟を除く

■ローンの名義人:父の割合が高い

父のローン参加が2世帯同居と比べ41%→62%に上がっているのが特徴です。



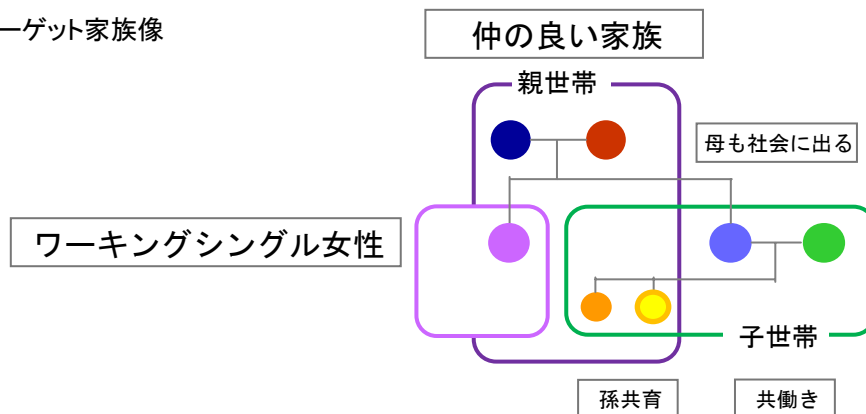
■2.5世帯同居の実態から「2.5世帯住宅」の提案へ

調査2の結果では同居シングルには学生や無職が3割強を占め、フルタイムの仕事に就いているのは5割強でありました。一方で調査1の対象となったヘーベルハウス居住者ではフルタイム比率は86%ありました。

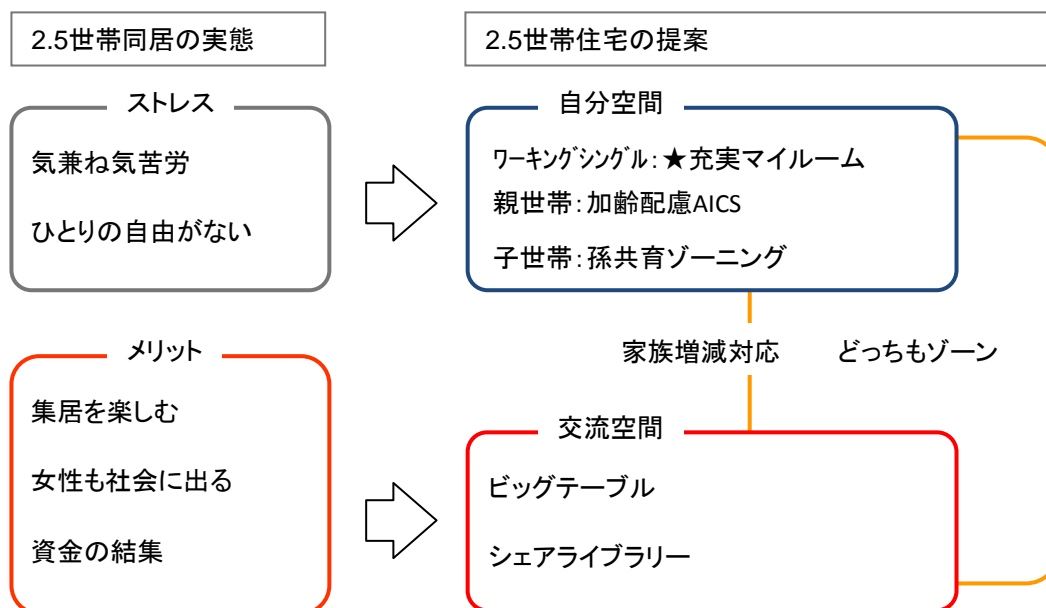
親元に居る単身者にはよく「パラサイト・シングル」という表現が使われます。しかし同居シングル層には、フルタイムで働き、一定の収入を得て経済的に実家に貢献している層も多く、特にヘーベルハウス居住者では高い比率です。そこでこのような「ワーキングシングル」が親世帯子世帯と同居するケースを想定し、住宅の提案にまとめました。

調査1のヘーベルハウス居住者では同居の兄弟姉妹は女性が65%を占め、調査2の結果から、2.5世帯同居では特に女性が家族が集まって住むメリットを高く評価し、一方で自立については他の居住形態と比較して課題となっています。そこで女性のワーキングシングルにターゲットを設定し、2.5世帯同居家族全体がストレスなく、メリットを享受できるような提案を目指しました。

□ターゲット家族像



□コンセプト図



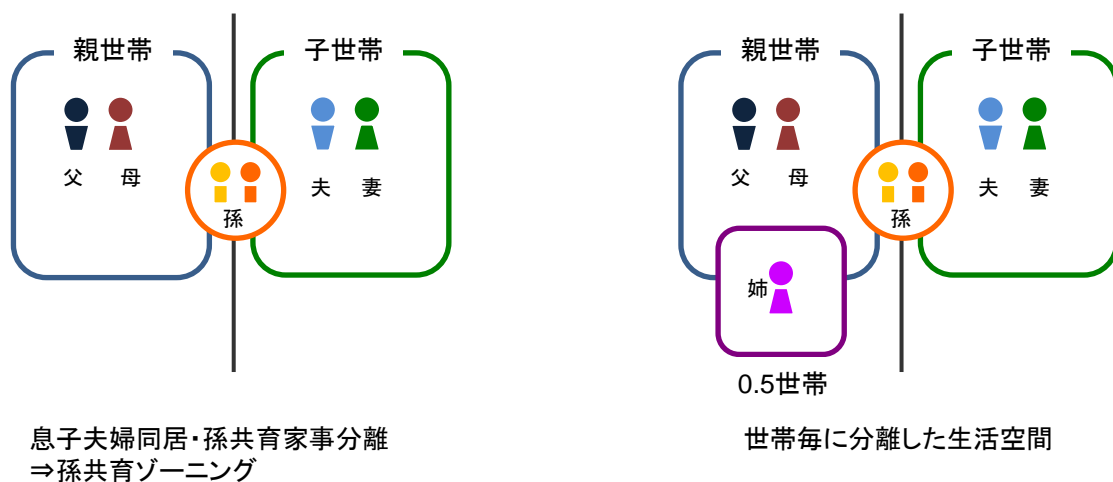
第4章 2.5世帯住宅モデルの提案

4-1. 自分空間の充実

■子世帯の家事分離：息子夫婦同居なら独立二世帯、または玄関共用の二世帯

2.5世帯同居では、息子夫婦同居のお嫁さんにとっては、親だけでなく義理の姉、または妹が居る関係になるので、子世帯妻の家事空間は分離しておくことが基本です。これが同居満足度に大きく影響しており、2.5世帯住宅のポイントといえるでしょう。これは2010年に提案した「孫共育ゾーニング」の考え方を継承しています。

しかし集居を楽しむ傾向は子世帯の妻にも強く見られ、大家族の中での気兼ね気苦労については2世帯同居と比べあまり気にしないタイプの人が多いようです。動線が重なったりすることに対しても比較的許容度が高いと感じられます。



■娘夫婦同居の場合は家事融合傾向が強まる

娘夫婦同居の場合はまだ事例が少ないのですが、基本的には2世帯同居の場合と同様に、生活を融合させようとする傾向が強く家事分離が必須ではないこと、更に出会うことを気にしないことから、より生活の融合を前提とした間取りでも良いようです。浴室の共用も良く見られます。

■充実マイルーム：ワーキングシングルが食事・入浴以外の生活ができる部屋を

2.5世帯同居では、同居シングルに資金提供をしてもらう代わりに、ずっと居住できる充実した個室を、最新ワンルーム賃貸のトレンドを取り入れて造ります。

充実マイルームは、ワーキングシングルの女性が食事・入浴以外の日常生活を自立してコンパクトに過ごすことができるよう考えられた部屋です。

1) 洗面化粧台

お化粧や飲物の片付けなどが、自室の中でできるようになります。

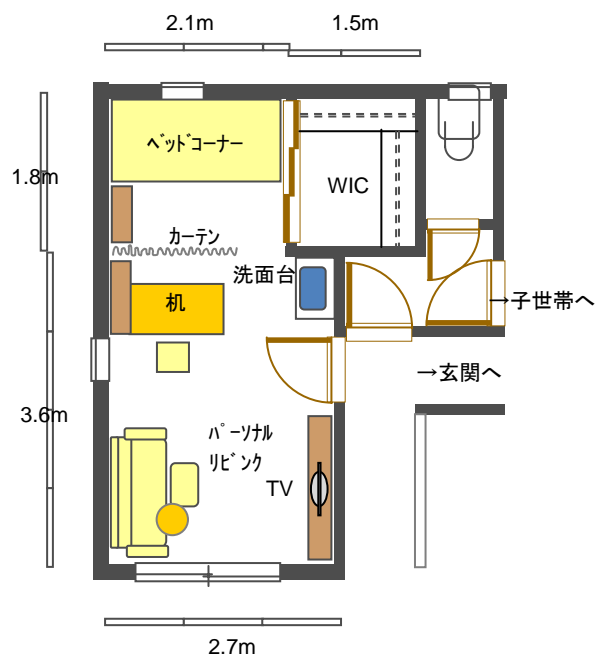
2) ウォークインクローゼット

衣類の収納量が取れ、小型の置き家具を収納して自室をスッキリと見せることが出来ます。

3) ベッドコーナー

ベッドコーナーとパーソナルリビングを分離し、リビングコーナーは友達を招くことが出来る部屋になります。

玄関からの動線は親世帯のLDKを通らず直接部屋に入れるようにし、生活リズムがずれていても影響しないように親世帯寝室から離しておきます。



■どっちもトイレ：両世帯が使えるトイレを

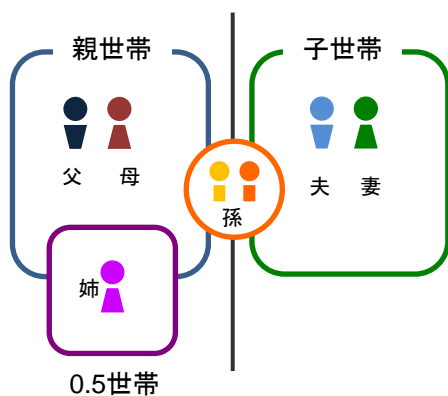
充実マイルームの近くにはセカンドトイレがあるとよいでしょう。親世帯用は親世帯の寝室のそばに設けられるので、深夜に使うことを考えると親世帯用途は別に2つ目のトイレが必要です。専用で設けることが難しければ、お客様用のトイレと兼ねたり、子世帯のセカンドトイレとしても使える位置にするなど、「どっちも使える」ように間取りを工夫します。

4-2. 分離した生活空間の中に交流空間を

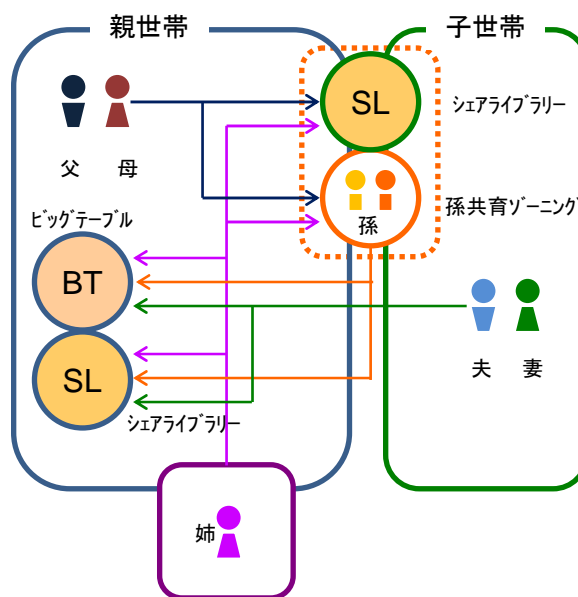
2.5世帯同居では、世帯間での気遣いがデメリットとならないように、日常生活空間を分離しておくことが基本となります。その中で、集居をより楽しめるよう、世帯を越えた交流空間を各世帯内に設けることがポイントとなります。

親世帯の交流空間には、イベントとして同居家族全員が集まって食事をする機会が多いことから、LDKには大きなダイニングテーブルが必要です。また、親世帯の本などが孫の目に触れるようにし、世帯を超えた情報交換のメリットを活かすために、同居家族全員の目に触れやすい本棚があるとよいでしょう。

子世帯の交流空間では、情報交換に加えて孫の遊び道具や本、お稽古事の用具などが共有できることが求められます。その際、子世帯のプライベート空間としてのLDKに立ち入らないで済むようにゾーニングの工夫が必要になります。



世帯毎に分離した生活空間



互いに世帯を超えて交流空間を訪問

■ビッグテーブル：同居家族が集まって食事できる空間を

2.5世帯同居では、家族が集まるイベントとしての食事が月1回程度はあり、全員が集まるダイニングスペースが必要です。

集まるのは親世帯が比較的多く、どちらか都合のいい世帯で行われる、という回答も追加調査では多く見られました。



一緒に食事のシーン(調査1追加調査より)

親世帯で毎週末の夕食(父母+弟/息子夫婦+孫2人)

親世帯や屋上で弟家族が遊びに来た時や毎年正月、花火大会や地元の祭り(母+妹/息子夫婦+孫2人)

■シェアライブラリー：同居家族が互いに本やCDをシェアできる空間を

2.5世帯同居では、知らないことを教えあい、共通の趣味を持つなど世代を越えた交流が行われます。特にワーキングシングル女性は家に最新情報を持ち帰るキュレーターとしての役割を果たします。各世帯それぞれの本やCDを同居家族の目に触れるライブラリーに置くことで、コミュニケーションの機会が増えます。



知の共有のシーン(調査1追加調査より)

電車の趣味は、親世帯・子世帯、そして主人の弟の趣味。主人の弟が撮影旅行に出かけた際に、電車関連のお土産を買ってきてくれる。また話題になっている本を購入すると、お互いに貸し借りする。共用の趣味室が欲しかった。(父母+弟/息子夫婦+孫2人)

子供が子世帯夫の妹とDVD、CDの貸し借りやPCを使わせてもらったりしている。(母+妹/息子夫婦+孫2人)

子世帯夫(私)と親世帯父の共通の趣味としてクラシック音楽があり、CDを貸すことがあります。(父母+妹/息子夫婦+孫2人)

子供と妹がゲームソフトの貸し借りをしているようで、妹からサブカルチャーの知識を与えられているようです。(母+妹/息子夫婦+孫2人)

親世帯が、子供の為に“子供新聞”をとってくれている。(父母+妹/息子夫婦+孫2人)

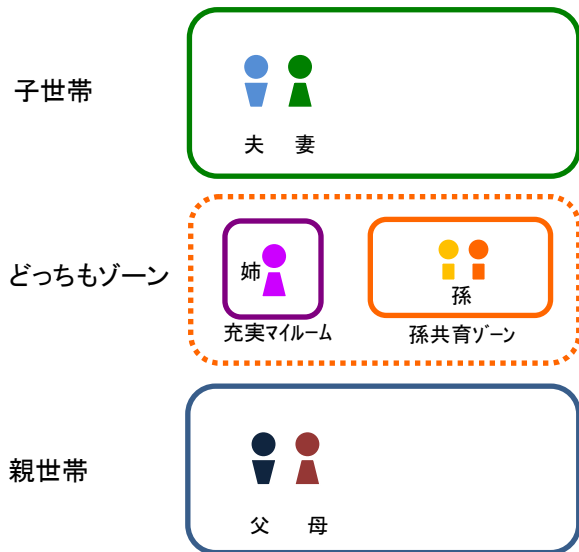
あったら良かったと思ったものは、共有の書架。ブックスペース。(母+姉妹/息子夫婦+孫3人)

4-3. 家族増減への対応力を増す「どっちも」マジック

■家族の増減：同居シングルの独立や子世帯の孫が増える可能性

同居シングルには、将来もずっと住み続けられるような充実マイルームを作るのですが、良縁があれば40代50代でも結婚のチャンスは巡って来ます。その際は空き部屋となりますが、その後は他の家族が使うことが考えられます。親世帯父、または母の個室としても魅力的ですし、また、玄関からのアクセスが良いので、教室や客間など、外部から訪ねて来る人を迎える空間としても利用しやすいと思われます。1階であれば将来介護室としても、外部サービスの導入がしやすく向いています。

また、子世帯の孫は、建設の後で生まれることも多く、当初想定の数では足りないこともできます。その時点で親世帯の片親化などで部屋数に余裕があれば、子世帯の孫の部屋として使うことも良いでしょう。



■どっちもゾーン：両世帯から使えるスペースで変化に対応

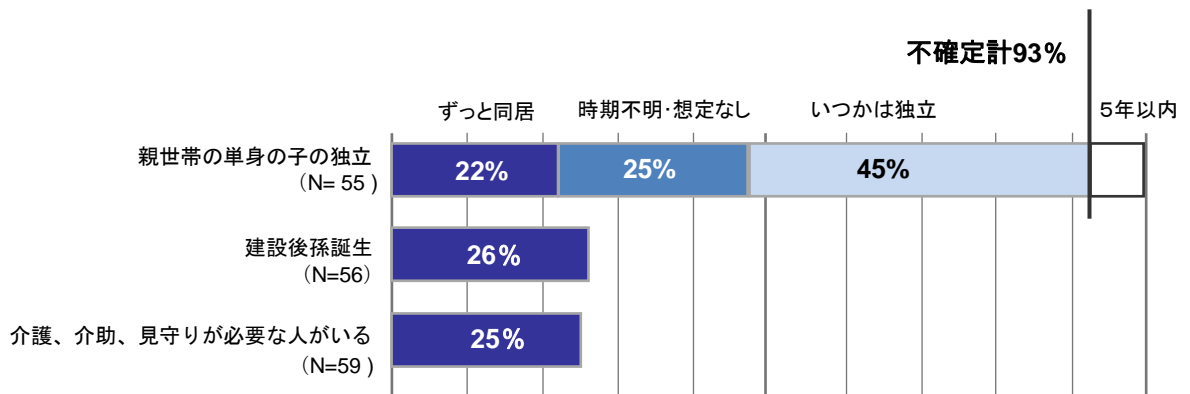
家族の増減に対応するためには、親世帯子世帯どちらの部屋としても使えるような「どっちも個室」であることが必要です。子世帯では孫誕生、成長につれ子供個室が必要になり、祖母・父母の死亡、兄弟姉妹の独立により親世帯では空く部屋も次第に生じるため、子世帯が広がっていきけるような設計が対応力を高めます。

家族間のことですから、動線が多少重なっていても、親世帯の主な生活空間を通り抜けずに直接行ける範囲であれば、子世帯の部屋としても使えると考えても良いでしょう。

■どっちも収納：両世帯が使える収納を

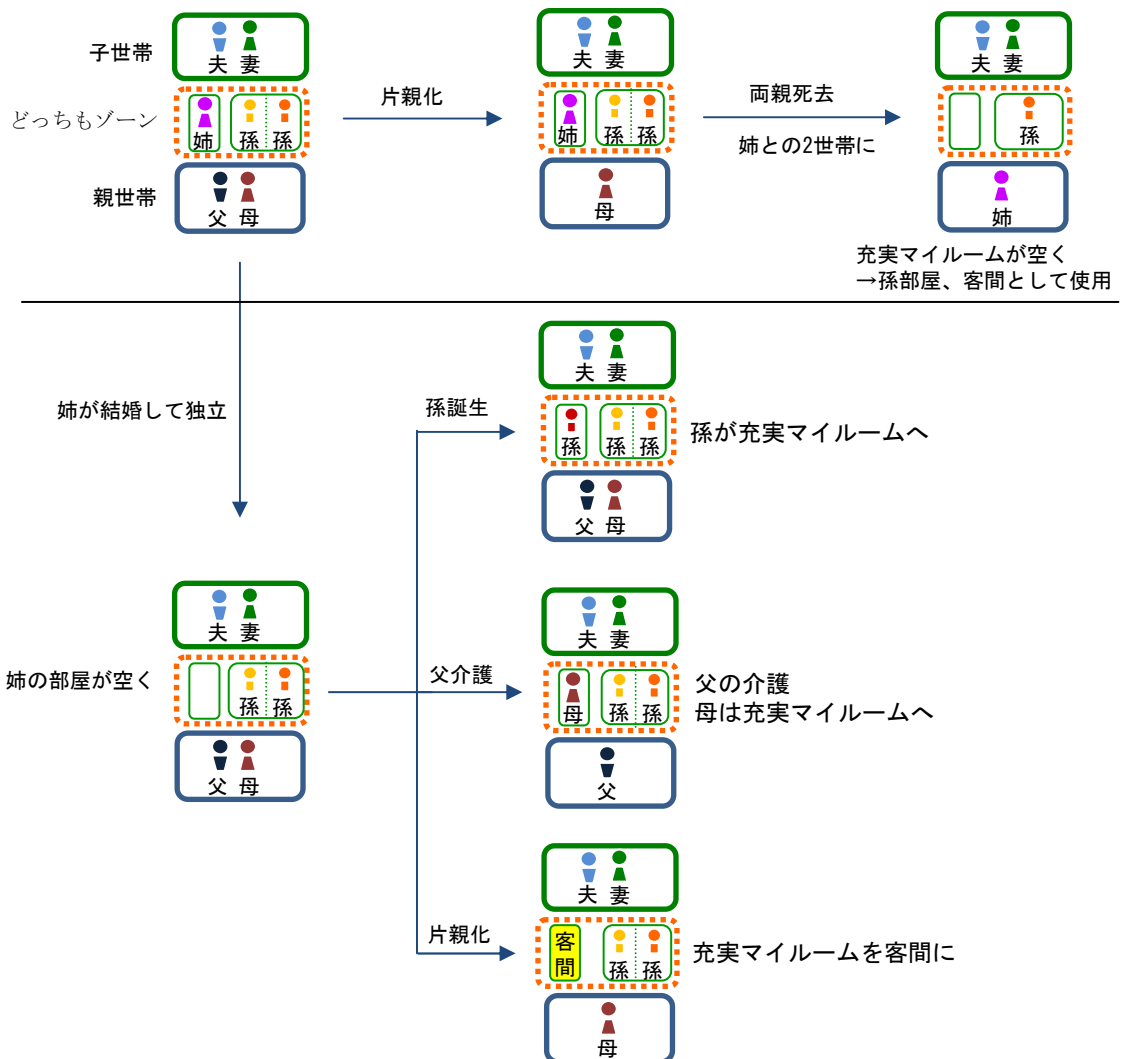
家族の増減と共に、モノの量も変化します。元々親世帯の収納には子の成長を記録したアルバムなど、子世帯や同居シングルに関係するものも多く含まれますし、実の子であれば実家で慣れ親しんだものも多いはず。階段下や小屋裏収納など、どちらの世帯のモノも収納できるような「どっちも収納」とすると使い勝手がよく、孫にも引き継がれていくことでしょう。

■ 家族構成が不確定



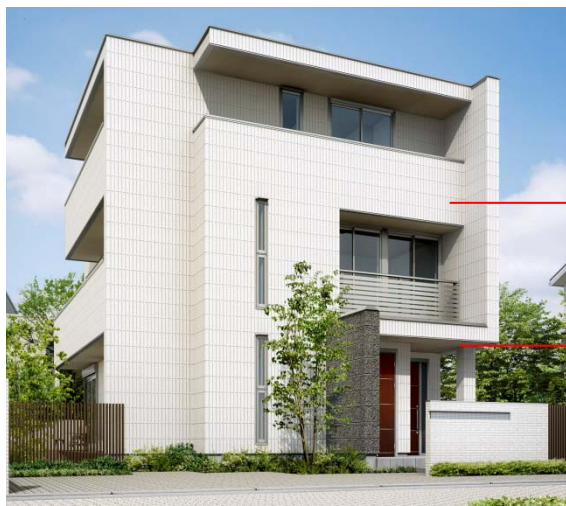
■ 充実マイルーム転用のストーリー

姉が独立すると、充実マイルームが空きます。また、姉がずっと住み続ける場合でも、やがて親世帯寝室へ姉が移動すれば充実マイルームは空くこととなります。充実マイルームを「どっちもゾーン」に置くと孫の個室、別寝室、書斎、客間など、転用の巾を広げることができます。



4-4. プランニング例

各フロアでコンセプトとなるゾーンの構成を表現。2階の「どっちもゾーン」に充実マイルームと孫共育ゾーン、親世帯のシェアライブラリーが置かれています。1階の親世帯には「ビッグテーブル」の他、ワンルームサニタリーなどのAICSノウハウ、3階の子世帯は+NESTノウハウを盛り込んでいます。



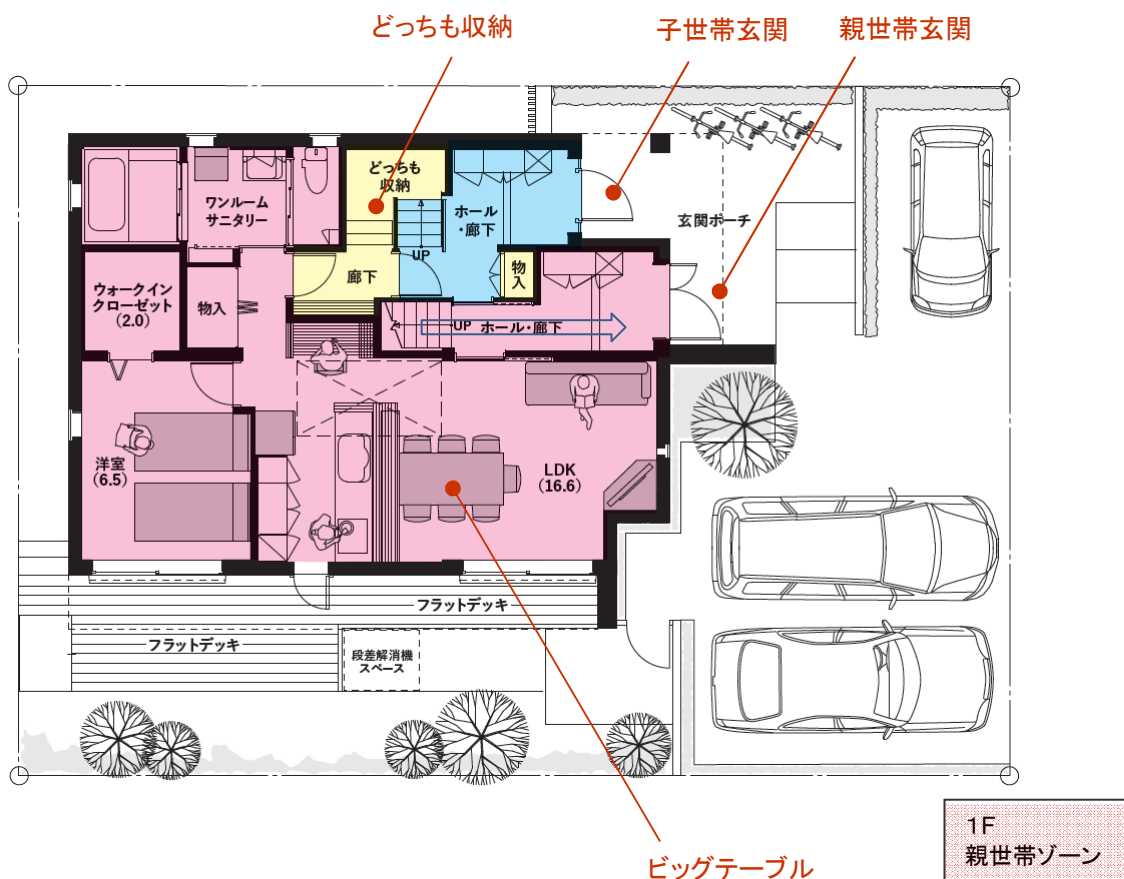
3F
子世帯ゾーン

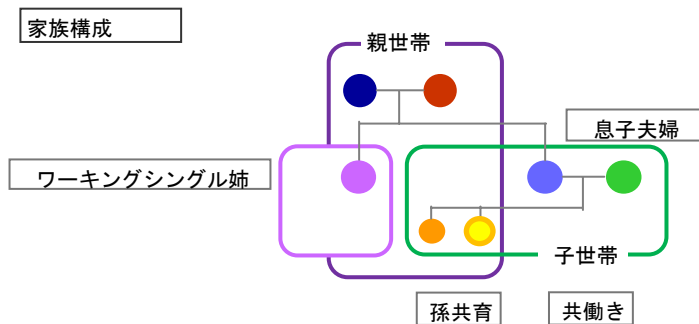
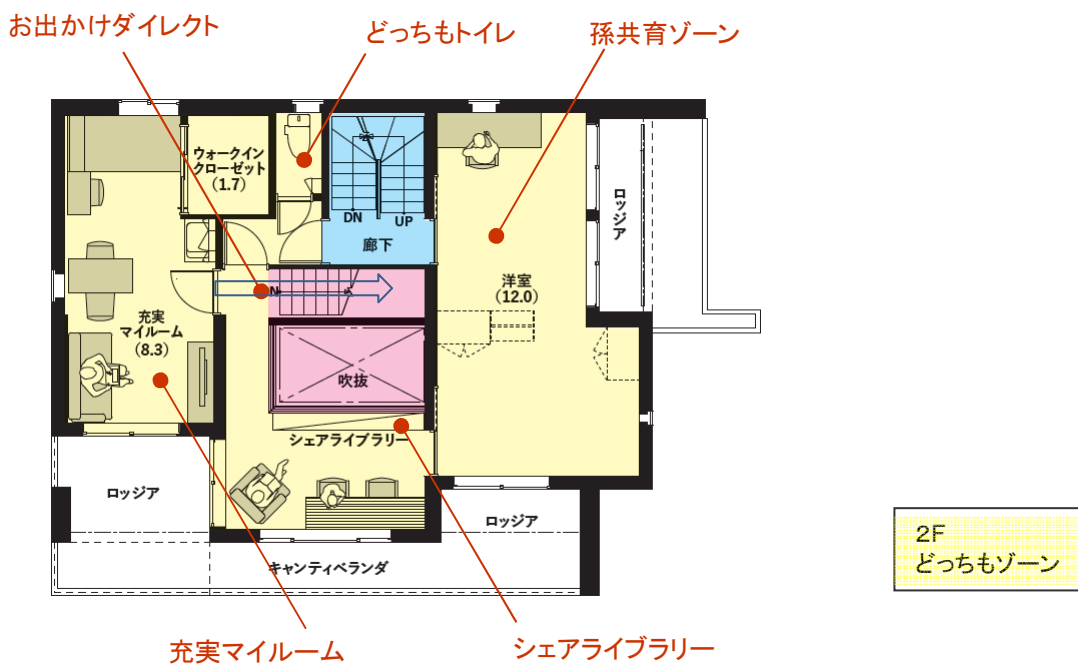
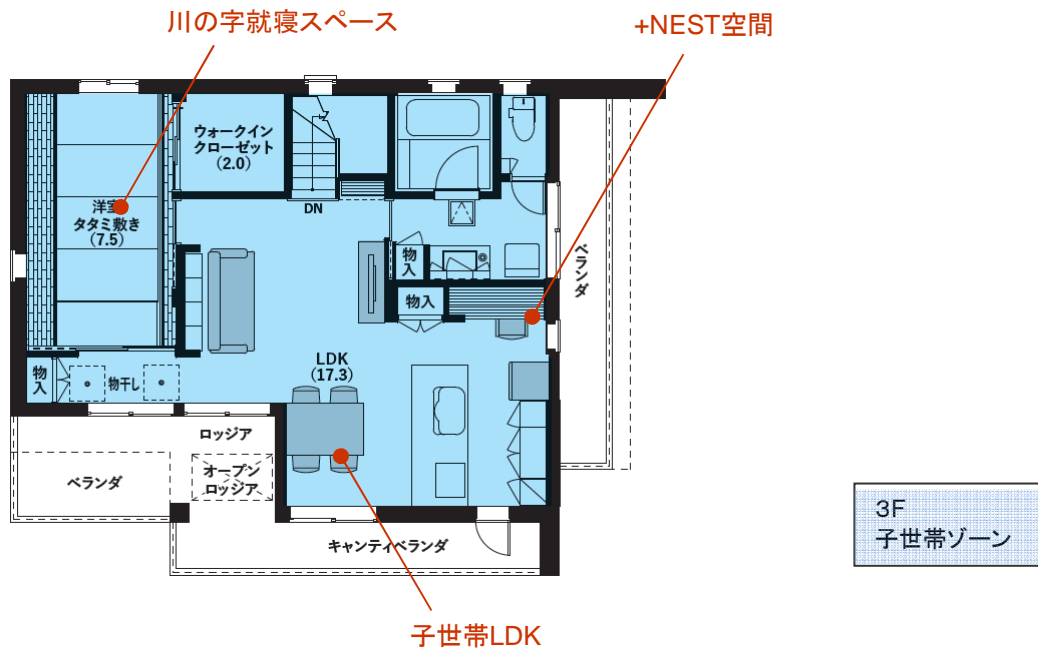


2F
どっちもゾーン



1F
親世帯ゾーン





■コラム：ヘーベルハウス居住者の声 2

ここまでご紹介できなかったアンケート調査でのヘーベルハウス居住者の声をご紹介します。

■兄弟姉妹の個室（充実マイルーム）の要望や将来想定（調査1-A調査より）

個室にはクローゼットを設けた。空いた場合は、父親の書斎か子世帯の子供部屋に転用する。(父母+姉妹/息子夫婦+孫1人)

ウォークインクローゼット(小さめ)がある部屋なので、将来空いたら家事室や書斎的なスペースに。(父母+姉妹/息子夫婦+孫1人)

この家を建てた兄の部屋が6畳しかなく、ちょっと気の毒です。現状29インチが置いてありますが、家を建てる時に大型の液晶TVがすっきり置けるように部屋を考えればよかったですと後悔しています。(母+兄/娘夫婦+孫2人;子世帯妻回答)

■家族の交流、同居して良かったこと悪かったこと（調査1-A調査より）

良かったことは、正月やお盆などの行事のさい一緒にできること、親世代の親戚づきあいに連続性をもてること。良くないのは、とりあえず心配をかけたくない程度の家族のトラブルも、出入りの様子からわかってしまうこと。(母+姉妹/息子夫婦+孫3人)

良かった事については、祖母からは、よく孫のお祝いやプレゼントなど贈り物をしてくれる、また、金銭面でも援助して下さる事がある。良くなかった点については、プライバシーについての感覚がお互いに違う事。突然私達の世帯の部屋に上がって来たり、変な時間帯に呼び出されたりと、あまり気を遣ってくれない事が多々。二世帯同居を考えた時になるべくそれぞれの生活を大事に、と全て、玄関、水回りも別にして、インターホンで連絡を取り合い、気配だけ感じる程度にして正解だった。つかず離れずの距離で、同居生活は上手く行っている方だとは思ふ。(祖母+母+兄弟/息子夫婦+孫2人;子世帯妻の回答)

お互いの干渉は多いが、全体的に見ると、助け合えることが多く、満足しています。二世帯だと、必要なものがなくなってしまった時など、もう一方の世帯にあたりと、便利な面が多かったり、食事の分け合いなどのできるのも、家事全般的にも、少し楽な面もあつたりしますね。(父母+姉妹/娘夫婦+孫2人)

基本的に別世帯として暮らすことが前提で同居した。夫の両親と同居なので、妻にどれだけ気を使うかがポイント。基本的に親世帯は子世帯に必要最小限しかアクセスしないように夫から両親に言い聞かせている。ただし、子供は自由に行き来しており、両親は孫が近くにいることで幸せそうなので、その点は良かったと感じている。孫の面倒を見させることでポケ防止にもなると思っているため、一定程度は意識して孫の面倒をみさせている。(父母+姉妹/息子夫婦+孫1人)

私自身が仕事や体調不良で動けないとき、子供やペットの世話を頼める、子供が主人の妹に大変なついているので休みの日など喜ぶ、などが良かった点です。気をつけているのは世帯間の入り口の管理を徹底し、馴れ合いで行き来しないようにしていること。はじめからルール(週末は食事を一緒にする。出かける時は声をかけるなど。)を作らず、不満をためないようになっています。(父母+妹/息子夫婦+孫1人;子世帯妻回答)

最初のうちは妻が妹に気を使っていたが、そのうち年齢も近いこともあり打ち解けた。妹が子供の世話をしてくれるので助かっている。(父母+妹/息子夫婦+孫1人)

孫が同居することで、親近感が増し、姉が明るくなった。玄関・台所・浴室が完全に分かれているので、普段は完全に別所帯であり、余分な気使いをしなくて済む。孫が走り回っても2階の音もさほど気にならない。(父母+姉/息子夫婦+孫2人)

有識者コメント：2.5世帯住宅の社会的意義

東京大学大学院工学系研究科 建築学専攻

准教授 大月 敏雄(おおつき としお)

■一世帯一住宅。ニュータウン神話の終焉

戦後、高度成長期に突入して人口が増え続ける大都市圏で、人々に住宅を供給するために、郊外でニュータウンが開発されました。そして、団塊の世代という人口のボリュームゾーンの成長により、郊外に画一的に土地を用意して、そこに建売住宅をどんどん並べていくことがハウジングの主流になりました。

政府も住宅政策と住宅産業を支援したいという考えから、一世帯に一住宅を供給するというフレームワークを支援してきました。昭和30年代にできた公団住宅の2DKの間取りは、基本的には夫婦と小さい子供2人という家族を想定していました。今は、2DKから3LDKにシフトしましたが、これは家族がそれぞれ個室を持つということ、そして、ダイニングにリビングがくっつき、団らんの部屋が大きくなったというだけで、基本の一家族を収容する住宅を供給するという考え方は変わりません。公も民もこれをハウジングの使命だと考え、そのようにニーズを読んできました。

しかし、不況になって、企業が社宅や寮など企業福祉を切っていく中で、多くの単身者が世の中に放出され、行き場を失い、家に戻るしかなくなりました。

同時に高齢化が進展して高齢者が増加する中、国は高齢者向けの施設を作ってきましたが、不況により国の補助金はどんどん減り、「自宅で最期まで面倒をみる」というようなスタイルに変わってきています。

このように高齢の夫婦、高齢の単身者、そして失業したり、離婚した子供、そのような単身者を家族が受け入れなければならなくなり、家に帰らざるを得なくなった高齢者や単身者にどのように対処すべきかという問題が、今、顕在化してきています。しかし、住宅供給者側はそれをまだニーズだと認識しきれていないような状況にあると思います。

■多様性のある家族で様々なリスクを分散

私は以前から「近居」という考え方を提唱してきました。家族の隣におじいちゃんとおばあちゃんが住んで、また近所に子供が住んで、お互い補いあうような住み方です。そのような住居形態の中では、孫が時々おじいちゃんの家に泊まったり、複数の拠点をふらふら移動しながら暮らしているような生活形態が生まれます。このようにリスクをみんなで分担しあうような住まい方をしている家族は意外と多いことが調査でわかっています。

今、世の中にはたくさんの空き家や空き部屋があります。それを利用して、なるべく近い範囲で、お互いのリスクを担保し合いながら、お互いに保険に入りながら生活しようということです。行政が誘導して、高齢者が多い町に子どもを呼び戻すことによって、人口バランスが取れてくるのではないのでしょうか。

■近居をひとつの家で実現する「2.5世帯住宅」

今回の「2.5世帯住宅」は、親がある程度の土地を持っていたら、いっそのことそこに集まってみんなで住み、お互いのリスクを担保しながら生活するという考え方です。

では、今、家族が個別化して縮小しているので、小さな住宅を作ればいいのかというと、世の中には空き家がたくさんあるので、それほど新たな小さな住宅のニーズはありません。それに小さな住宅を大きくしようというのが戦後の一貫した住宅政策であり、我々の夢だったので、今さら逆に向かっていくわけにもいきません。そう考えた時、二世帯をずっと提案してきた旭化成ホームズさんが、二世帯に“0.5”を足して、家族のリスクを長期にわたって回避できるような住まい型を提案されたということで、大いに評価できると考えています。

■ 自助的なシステムとしての拡大家族の可能性

「2.5世帯住宅」は、二世帯住宅の親世帯と子世帯の間に、“0.5”を挿入するというプランです。二世帯住宅でよく問題となるのは、親世帯と子世帯を完全に仕切るか、どこにドアを付けるかという話です。実際、親子というのは意外と仲が悪いもので、結局、息詰まりの家を作っちゃったみたいな失敗もあるはず。嫁姑の間には気兼ねや気苦労がある。そこで、間に0.5世帯の主がいて、緩衝帯となる。その主は孫にとってはおじさんであったり、おばさんであったりします。直接対立的になりがちな構図の中に、おじさん、おばさんが紛れ込んでいることにより、すごく人間関係の多様性が引き出されます。

昔の農村はまさにそんな感じでした。兄弟が多く、下は学生から、一番上の兄弟はもう子供が成人式というように年齢の開きがあり、それが同居していました。下の子は大きくなり部屋が狭いので、納屋で寝ているということがありました。家族にとってこの状況はありがたく、直接ではなくいろいろ愚痴が言えたり、子供の面倒をだれかに見てもらったりできます。場合によって、小さな兄弟が多少稼げるようになると、ちょっと家賃を入れて家計を助けてくれたりします。自助的なシステムとして家族が機能しているわけです。

■ 多様性のある住まい方提案が持続的な地域社会を生む

核家族の場合は、親はローン返済で一杯一杯、子供は受験で一杯一杯、みんなが一杯一杯で暮らしています。その家族に“0.5”が加わることによって、ちょっと余裕ができるのではないかと考えられます。人間関係が多様になると、誰かとけんかしても他の人と結びついたりできます。

町全体にとってもメリットがあります。“0.5”の人は単純に労働力として期待できますし、税収も上がる。そして地域社会にとっても子供と老人の間の世代が町にいるというのは重要です。しかし、単身で住んでいると地域社会と接点がなく、地域の大人たちは若者や単身者を“得体の知れない人種”として排除したがる傾向にあります。しかし一方で、若者がいなくて祭りもできないという実態があります。これが、2.5世帯の中にいると、家族が子ども会に入っていたり、老人会に入っていたりして地域と接点があり、それを通じて神輿の担ぎ手や「自治会の出店で焼きそばを作って」などと依頼がきて、若者が社会に認識されるようになります。2.5世帯住宅がそういうツールになったら素敵だなと思います。

かつての郊外に作られたニュータウンは、今一斉に高齢化してしまっています。2.5世帯のようないろいろな形態の住まい方があることで持続力のある社会が生まれます。そうした意味で、大手ハウスメーカーは家の建物を売るというより、住まい方を売ることが重要な時代となっています。

これまでは1世帯、2世帯という整数の家族を考えてきましたが、“0.5”のように端数という考え方があってもいいし、今後は、その“0.5”も単身の子ども以外に、介護が必要な高齢者やシェアハウスのような疑似家族であったり、いろいろなパターンが出てくるような気がします。今後は家族の多様性をどのように提案していくかということが住宅の大きなポイントとなってくると考えられ、今はその大きな転換点に来ていると思います。

調査報告書執筆者:

旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所 松崎 昭夫

旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所
二世帯住宅研究所 松本 吉彦



都市型親族集住 2.5世帯同居の実態

調査報告書

発行： 2012年8月3日
発行所： 旭化成ホームズ株式会社
くらしノベーション研究所
二世帯住宅研究所

〒160-8345 東京都 新宿区 西新宿 1-24-1 エステック情報ビル
電話 03-3344-7045

ver. 1.01 (120803)